

群馬県歴史の道調査報告書第四集

歴史の道調査報告書

沼田・会津街道

群馬県教育委員会

## 序

本県は日本列島の中央に位置し、古来より表裏日本、あるいは東西日本の交通要路として多くの主要街道が通り、重要な役割を果たしてきました。また、同時にこれらの道は県民の先祖が生活の場として、何百年もの長い間歩みつづけてきた道でもあります。この歴史の道ともいべき道の調査は、昨年度から四か年計画で開始され、本年度は第二年次にあたり、三街道を調査いたしました。

表日本と裏日本とを最短距離で結んでいた三国街道・木工品や米が輸送された会津街道及び中毛からその街道へ通ずる沼田街道・善光寺参りや草津温泉への湯治客でぎわった信州街道の三街道であり、それぞれ特色のある街道であります。しかしながら、この三街道も第一次調査の日光例幣使街道、銅山街道と同様、街道本来の旧態をとどめている箇所はわずかしかありませんでした。

つい数年前まで、旧宿場町に残されていた道路中央の堀割の清流も、今回の現地調査をしてみると跡形もなく一面舗装され、昔の面影はすっかり消えておりました。これらは、近年産業経済の著しい発展により、地域開発が進み、かつての街道は改良され交通の不便さは改善されつつあります。反面、街道沿いの文化財はまた急激に失われてきているのが実情であります。

これから社会は、経済・文化を発展させると共に、心の郷里ともいべき文化遺産をも大切に保存し、バランスのとれた社会の発展をはからなければなりません。いま、この期に歴史の道調査を実施することは、急激に消失しつつある道に伴う文化財を記録し、保存する上で、誠に時機を得たものと言えましょう。

本報告書が県民の今後の研究資料として、あるいは史跡の探訪の資料として広く活用されることを念願しております。

末筆ですが、現地を踏破し文化財を確認する大変な苦労をして調査していただいた調査員の方々、関係市町村教育委員会及び御協力いただいた地元のみなさまに、心より御礼申し上げます。

昭和五十五年二月一日

群馬県教育委員会教育長

横山 嶽

巖

## 目 次

序  
群馬県教育委員会教育長 横山 嶽

III 沿線地図 ..... 17  
II 沿田街道・会津街道の現状と文化財  
一、前橋から米野宿へ ..... 25  
二、米野宿から溝呂木宿へ ..... 32  
三、溝呂木宿から南雲宿へ ..... 35  
四、南雲宿から森下宿へ ..... 38  
五、森下宿から沼田へ ..... 42  
六、沼田から原田集落へ ..... 45  
七、原田集落から花咲・幡谷集落へ ..... 48  
八、原田集落・高平宿から大原新町へ ..... 50  
九、大原新町から越本集落へ ..... 55  
一〇、越本集落から国境へ ..... 60

I 沿田街道・会津街道の概観	1
一、街道の概観 ..... 3	
2 会津街道 ..... 4	
1 沿田街道 ..... 3	
二、街道と文化 ..... 4	
三、脇街道について ..... 6	
四、街道沿いの地形 ..... 7	
1 米野宿の立地について ..... 7	
2 湧水と集落について ..... 8	
II 道の確定	10
一、道の確定 ..... 62	
あとがき ..... 66	

# 歴史の道調査実施要項

## 一、目的

古来、人や文物の交流の舞台となってきた古い道や水路は、生活や文化を理解する上で重要な意味をもつものであるが、並木街道や関所跡として部分的に指定された史跡等を除けば、開発その他によって急速に失われてきている。

そこで、これら「歴史の道」ともいるべき由緒のある道や水路とそれらに沿う地域に残された文化遺産を調査し、周囲の環境を含めて総合的・集約的に保存整備し、県民による積極的な活用に資することを目的とする。

## 二、調査主体者

群馬県教育委員会

## 三、調査の方法

### (1) 指導

調査の方法・計画・まとめについては、文化庁係官より指導を受ける。

### (2) 総務

調査の計画・運営・地元との調整等、全体を統括する。

### 調査員

県教育委員会事務局管理部文化財保護課長並びに担当職員

### (6) 調査対象

県内の学識経験者等から選任し委嘱する。

中村一雄 文化財調査委員  
須田武雄 文化財調査委員  
高橋武親 文化財調査委員  
大友農夫寿 文化財調査委員  
阿形登氏 文化財調査委員  
星野靖 社会教育指導員

青木宏 県立伊勢崎東高等学校教諭  
古屋毅士 前橋市立元総社中学校教諭  
利根村教育委員会

(4) 調査協力機関  
前橋市教育委員会 沼田市教育委員会  
富士見村教育委員会 北橘村教育委員会  
赤城村教育委員会 昭和村教育委員会  
川場村教育委員会 白沢村教育委員会  
片品村教育委員会

### (5) 調査方法

#### ○一次調査

関係市町村の協力を得て、調査対象の旧街道の路線と現状との異同の概略を把握する。

#### ○二次調査

一次調査の結果を参考にして、調査員による現地調査を実施する。

昭和五十四年度は、沼田・会津街道及び他街道とする。

(調査事項)

- ① 道・河川・運河等及びこれらに沿う遺跡、例えば一関・番所・一里塚・宿場・本陣・脇本陣・庄屋等屋敷・御茶屋・詰所・御仮屋・城館・陣屋・奉行所・古戦場・会所並木・石疊・橋梁・隧道・常夜燈・道標・地蔵・道祖神・井戸・河岸・渡船場・波止及び歴史的名所（社寺・札所・靈場・温泉・宿坊等）・名勝（庭園等）の分布状況と保存の実態。

- ② 無形文化財・民俗文化財・天然記念物の分布状況と保存の実態。

- ③ 道・運河の歴史的意義・格・沿革。

- ④ 沿線に設置されている博物館・郷土館・資料館・史料館などの公開施設の実態と問題点。

- ⑤ 江戸時代の国界・藩界（正保・元禄・天保）及び郡名。

四、調査のまとめ

報告書は、A4版サイズとし、縦書き、二段組みとする。道・運河」とに分冊とし作成する。

保存資料は、地図・写真・その他とし、文化財保護課に保存し、県民の利用に供する。

# I 沼田街道・会津街道の概観

## 一、街道の概観

### 1 沼田街道

沼田城主真田家の家臣加沢平次左衛門の書き残したという「加沢記」には、前橋より戸倉お閣所まで治七里と記されている。

この沼田街道は、赤城山の西麓利根川の東岸に古来より開けた道とされてゐるが、その開道についての諸説を挙げてみることにする。

沼田根元記には、——和田四郎安重上洛して平清盛より利根勢田郡を拝領のこと、和田四郎上洛のとき大道を作り、この時沼須村に舟の渡し初る。夫

より村続きの貝之瀬、糸久保、森下の四ヶ村出来し村なり——とある。もつと古く、六、七世紀の古墳時代をふりかえってみると、利根川東側の村々、三原田台地からの石器土器類の発掘をはじめとして、昭和村の岩下清水古墳群、さらには森下古墳群からは、貴重な出土品五鉢鏡などが発見されており、先住民の抵抗を追って、あるいは優柔し、金属性の武器による進攻が、利根

川東岸の下流から上流へと進んだようと思われる。  
後に沼田街道と呼ばれる宿駅は、前橋を出発して米野—溝呂木—雨雲—森下—沼田とおちつくのである。

この沼田街道を村々ではどう呼んでいたか。

酒井松男氏の『前橋新風土記』によると、向町通りは沼田街道と呼んでいたという。明治十年の町村誌に沿道の村々に記されたこの道の呼び名は次の

通りである。

沼田街道—荒牧、川端、日輪寺、米野、持柏木

前橋街道—川越、森下、橡久保

沼田道—関根

清水越往還—荒牧、上小出

沼田往還—北上野、長井小川田

沼田東入道—田口

沼田通東往還—津久田

沼田通東往還—津久田

この明治十年頃は、前橋から沼田へ行くには清水新道、鳥山新道が開通し、

岩本から棚下へのはね橋が出来たために、本街道である米野、溝呂木通りはさびれ、津久田、宮田、八崎、田口、関根、荒牧を経由する道が沼田街道として利用されていたのである。したがって、上小出、荒牧、関根、田口、真壁、八崎、博、宮田、猫、津久田等の村々では北越清水越往還と呼んでいた。

また前橋から荒牧までは古くは沼田道と白井道を兼ねていたことは古い道しるべが物語っている。

荒牧村の明治十年村誌には清水越往還とあるが、荒牧神社前のわかれ道から東は沼田街道と記されている。  
なお津久田村誌に沼田通東往還と記してあるのは、清水越往還の方が利用されているため、本街道は東往還として記されている。  
田口村誌も同様に沼田東入道と津久田村同様に軽くあつかわれている。津

久田村も田口村も沼田街道は村はずれを通りいたのである。

なお森下、川額等利根郡地方では沼田街道といわす、前橋街道と呼んでいたのである。

## 2. 会津街道

尾瀬越えの会津道が、いつごろからあつたかはつきりしないが、片品村土出に「土井出庄」が安樂寺院領として置かれていたことから、平安末期、東山道から分かれた道が通っていたと推定される。それ以来、尾瀬越えの通路が利用されていた。

街道として整備されたのは、沼田城主真田信幸の時代である。慶長五（一六〇〇）年閑ヶ原の戦いの時、沼田城は関東方徳川家康に従つたので、大阪方の会津上杉氏に備え、尾瀬の入口戸倉に關所が設けられた。その後戸倉の關所は関東守衛のため幕府直属の代官支配とされていた。ついで追貝に柵を架橋し、沼田から東へ軍勢を送るのに備える等、この街道が軍事上重要視されていった。

会津街道は古文書等には、会津道、会津裏道などと記されており、土地の者はオーカン（往還）とだけ呼んでいた。

街道の起点は沼田街道の終点である沼田城の正門に向かう本町の辻御馬出しの交差点で、そこには高札場があつた。

沼田から会津街道に沿つて品川村の山間地域にはいることを、俗称「東入り」と呼んでいた。この東入りには大きく二通りの道筋があつた。その一つは沼田を出発し、川場村を通り花咲峠越え、千貫峠越え、赤倉峠越え等によつて花咲を経て戸倉へ向かう道である。他の一つは沼田より東へ一路白沢村高平へ向かい、栗生峠越え、数坂峠越え、椎坂峠越えで、大原新町に出で追貝より戸倉へ向かう道である。

戸倉から尾瀬までの街道は山道で人家もなく、草木が茂り、交通にさわる

ので三年に一度普請が村人によって行なわれ、街道沿いの村々の大規模な負担となっていた。

また、戸倉には曲屋など東北文化の交流の名残がみられる。

## 一、街道と文化

江戸時代、この地方の農民の娛樂芸能としてやうびしたのは歌舞伎芝居と操り人形であった。その遺産として文化財に指定されたものに上三原田の歌舞伎舞台はじめ、津久田の人形とその舞台、横室の歌舞伎衣装等がこの街道に残つていて、いまもその伝統を伝えていく。

上三原田の舞台はその機構がすぐれていることで有名であるが、赤城南面から利根川上流のほんどの集落に舞台があつた。特に勢多郡の北橘村、赤城村から利根郡、吾妻郡にかけては多くの舞台が残されていて、富士見村横室、赤城村の各集落や渋川市、子持村、水上町や利根郡の各村々では、いまも地芝居が公演されている。



上三原田歌舞伎舞台

舞台の多くは焼失したり、解体されたりしたが、残っているものも集会所や社務所に改造されたり、持柏木や長井小川田のものは神社の拝殿となり、永井の舞台は神楽

殿に改装されている。三原田や津久田の上の森、下の森等は舞台として残っている。

舞台も地方色があり、北橘村赤城村等の舞台はがんどうがえしと呼ぶ壁面

をたおすと舞台面が広がる機構となっているのが特徴と云ふよう。

利根郡の片品川流域の舞台は、マイテンと呼んでいる。舞殿か前殿か不明

であるが、神社の拝殿の前に山門のように舞台の中央が参道になつていて、舞台として使用する時は中央の参道の部分に床をすればよい型式になつて

いるのが特徴である。

歌舞伎衣装も、明治時代には沼田街道沿いの下小出、横室、米野、津久田

と、沼田、本郷（箕郷町）にあつた。古いものは横室のものだけ残つていて

県の重要な文化財に指定されている。

現在の地芝居に使われる衣装は、横室のほかは荒牧の市川鏡十郎、沼田の

内藤家のもので、現在のものである。

現在省内で演出可能な操り人形芝居のうち津久田、沼須の両座がこの街道

筋にあるのも注目すべきであろう。松井田町八城の城若座以外は下牧、尻高

等すべて利根川上流地区であり、歌舞伎と共に利根川上流地区に残つている

ことは、江戸時代に沼田藩や旗本領で禁令がゆるやかであった伝統が残つて

いるものと思われる。

街道筋の文学碑や庚申塔、道祖神、馬頭観音等に刻まれた文字にも文化的

交流があることがわかる。たとえば会津道に多く見られる戸倉の藤原和の書

が赤城村迄まで見られ、赤城村には賀和の弟子須田沢舟があり、その弟子に

茂木香園があり、賀和の影響は沼田街道に及んでいる。小出の藍沢無満の書

も昭和村まであり、無満の高弟が多かった北橘村、赤城村、子持村等に無満

の影響が多く残されている。角田無幻、天野桑古、宮沢得所等も見逃すこと

のできない人達である。

会津、沼田両街道だけに深い関係のあったものに法神流剣道があつた。流

祖橋本法神の高弟であった三田三吉と呼ばれた深山の須田房吉、上南室の町田寿吉、上畠田の森田与吉が沼田街道の村の者でこの流をひろめた。

須田房吉は追星の星野家の養子となり、会津道方面へ法神流をひろめた。

その後も法神流剣道はこの地方農民の間に盛んであり特筆すべきものであつた。

利根東入り、会津道方面（利根郡一帯）から県内各地に普及した養蚕技術に柏周郎流いぶし飼い法があつた。

明治元年七月、会津藩士が戸倉方面に攻めて来た時これをむかえ撃つため、針山集落の水井柏周郎家へ雨の中を沼田藩士が来て、衣類等を乾かすためにたき火をしたところ、飼育中の蚕が良結果であった。これにヒントを得て永井柏周郎が考査したのがたき火によるいぶし飼いである。柏周郎はこの飼育

法を利根郡下はもちろん、北群馬郡をはじめ勢多郡の大胡町大屋の外、富士見、北橘、南橘、赤城の村々へ出張指導をした。明治二十年柏周郎の死後は妻のいとが代つて指導に当つた。

勝保沢諏訪神社に柏周郎夫妻の頌徳碑がある。一人を靈神と崇敬しているのが注目される。

大胡町の大量に柏周郎の記念碑がある。

勝保沢の柏周郎夫妻の頌徳碑が靈神として崇敬しているように、養蚕農家

は神社に豊蚕祈願をする風習があつた。

沼田街道付近では、津久田の千石櫻荷は參詣者が多く、白氣を供える風習

があつた。

横室の十二山には衣笠大神の社がある。

上小出の香葉寺境内には蚕影山の碑がある。

前橋の橋林寺境内外に蚕糸供養碑が残されている。これは糸の町前橋の製糸

関係者が、蚕の供養のために建てたものであろうか。

### 三、脇街道について

明治十年の深山村誌に「前橋より岩城国会津郡若松へ通る新街道」というのがある。これは利根東入りから前橋への近道であった。

これは利根村青木から赤城山北麓の白井原野を通て深山へ出て、更に赤城西麓の横野を芳か沢、沖門、硯石、西峯へと、沼田街道より高い所を通る道で、片品川と沼之澤の間には深山で沼尾川の谷があるだけで、急坂がなく、利用者が多かった道である。

深山方面では「石井新道」と呼び、石井方面では深山道と称した。石井までは深山のほかほんどの人家のない原野を通るので、溝呂木等の宿場では馬の口銭をとられるので、わざわざこの道を通るものもあったなど。

西峯から沼之澤へはくだらず、市之木場、漆瀬、引田、横室、原之郷を経るか、石井、小沢並木、原之郷を経て前橋へ至る往還であった。原野の部分はほとんど廃道となつたが、いまは大規模農道が開通している。

沼田街道は日輪寺で桃木川を渡り西進して荒牧へ出たのであるが、遡りになるので、桃木川の左岸を青柳、北代田を経て桃木川を渡り、旧才川、細か沢を経て脇橋へ出る道も利用された。また戸ノ方面への近道としては、日輪寺、青柳、竜藏寺、下細井、幸塚、三俣、片貝を経て天川並木へ出たと思われる。この道を女道と呼んでいた。一步ずつ歩かなければならぬ昔の人は少しでも近道を選んだのであろう。

沼田街道は、片品川に橋がないこと、水井沢、沼尾川の深い谷を越すための急坂があること等により、沼田盆地から利根川右岸を経て上白井方面へ行く道も選ばれた。しかし、この道も子持山続きの十八坂の難路があつたのである。これに関しては次のようないくつかの資料がある。

乍恐以書付奉願上候

一当村之儀沼田町御城下住米勒ニ而前々る商人荷物北牧伊能沼田町と越米申候、然所先沼田本多豊前守様黒田大和守様御城主節、御家臣様方東シ五料

通被遊時々西シ北牧通被遊候節、御領分百姓ニ北牧送り被仰付候間、當村ニ而者商人荷物斗羅立仕り候故、御馬役役入用六升給米其外高掛役、近村繩場者御免被下候得共當村ニ而者相勤申候

一当御城主土岐丹後守様、碧村坐所在共御領分ニ相成候二付、御領分江御用ニ而御通行被遊、勿論江戸往来御家臣様方日々御通被遊、其外御城米附送り被仰付候得共、当村も沼田町江道法四里御座候所、前峰中ノ嶺七曲十八坂小石ニね市坂と申候有之、其外小峠等數多難場ニ御座候所、霜月中旬三月下旬迄毎年五尺余之雪降積リ、寒里之通行恐難儀至御座候、殊ニ当村之儀者、越後山続子持山屢ニ而土地悪敷、別而近年百姓困窮仕候故、持馬等よわ馬ニ而御座候所、右之難場故御城内荷物附送り兼候

一先月中旬より御城米武百駄巻送ル様ニ被仰付候所、右之通大難場殊ニ当年ハ例年五月雪深ク通行難成、其上村役等相勤候ニ付、惣百姓不得心故、来ル中旬迄御日延奉願上候、尤右之内七拾四駄當各中附送候得共、右之通百姓不得心故、私共並祖頭割合を以屯駄ニ付送七拾武文宛増貨仕附送り申候、然上者来ル正月中旬より相残百武拾六駄御城米附送り難儀至極仕、無是非此度御訴申上候

右之通被為開召詔以御意悲外難場之通り、村役等御校免被成下、御用荷物御城米無間附送り候様被為仰付被下置候ハハ、難有奉存候、以上上州群馬郡上白井村之内伊能

延享元年子十二月

問屋 新左衛門印

名主 平右衛門印

石原半右衛門様

御役所

これは東通り（沼田街道）を行なうべき沼田家中の者が西通り（十八坂通り）をすることもあり、御城米もつけ送ることもあるが、十八坂の難所の伝馬は大変なことであるから外の通り（沼田街道）往来輸送にしてほしいといふ歎願書である。

このように公用輸送の伝馬は駿遠しながら商用荷物は盛んに輸送されていた。

また、享保十六（一七三一）年には白井と上白井とが椎場の争いで訴訟をしている。

上白井と白井の双方とも「宿が馬廻り場であると主張し、種々の証拠を出して争つたのである。長文であるので略することにするが、結局はこの道は駿道であり、「宿とも公式の馬廻り場ではない」とことになった。

沼田江之往来者米野ら森下通二面、此度双方申立候者駿道二面極り候、馬廻二面無之候得者、仕業市荷物手馬直通之分からり荷物又者草儀ニ面も、相互勝手次第附シ可申候、且又市荷物ニ而も商人江先渡候分并其外引掛候商人荷物者、向後双方無異論其商人と相対次第是又相互通可申候

というものであった。

沼田街道の宿場だった米野、森下、南雲等の村々に安政七（一八六〇）年「差上申済口証文之事」という文書が残っている。

これは長文であり、くどくどしい文章であるが、その要旨は次のようなものである。

森下、南雲、溝呂木、米野四か村は、中山道本庄から五料の関所を通り、前橋陣屋から沼田城下への本街道であって、國々の御巡視様をはじめ、御朱印や御証文を持つた役人や、沼田の城主の通行路であり、諸家中の人々のお休みやお泊り等があり、そのために日々人足一〇人、馬八疋ずつ用意している本街道の宿場であり、一般の産物や商人の荷物等の繼き立ても多く、農間駄賃かせぎもしてきた。

ところが、弘化二（一八四五）年から沼田の伝左衛門、五郎兵衛等が検断として勝手に問屋同様のことをはじめ、本街道である森下へは一切の荷物を搬ぎ送らず、西通り白井方面へ送るようになつたため、森下、南雲、米野等では死活問題となり、沼田検断兩名と白井、上白井を相手方として訴訟を起

したものである。溝呂木もはじめ調査していたのであるが、訴訟費用等の關係で村の意見が一致せず途中で脱落した。溝呂木は前橋や沼田よりも、白井宿の経済圏があつたことも脱落の一つの理由であったかも知れない。

沼田検断側では、西通りも本街道であり、上白井や白井には本陣や問屋もあり、東通り同様御朱印便や領主も通ると主張して争つたのであるが、結局は昔からの本街道は米野通りであることは歴然とした事実であるため、森下、南雲、米野各宿方の勝訴となつたのである。

この訴訟のため、安政七（一八六〇）年三月から七月まで森下、南雲、米野は代表者を江戸へ出張させていた。訴訟費用は米野、南雲、森下各村で四両余ずつを出している。なおこの出入一件で、米野では百拾両両余を出費している。

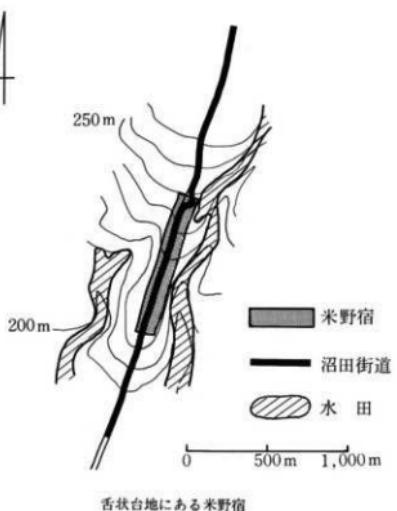
本街道と、利根川沿いの川通りのほかに、赤城村、北橋村方面から前橋への往還として中通りというのがあった。それは、赤城村の各村々から、三原田、小室、真壁、中箱田を経て五六橋で橋川を渡り、橋山の東の松並木道を通って田口で白井道と合流した路線である。

#### 四、街道沿いの地形

##### 1 米野宿の立地について

米野宿の位置は標高二二〇メートルから二五〇メートルまでの傾斜面にある。赤城山麓に広がる舌状台地を沼田街道が通つてるので、このような馬の背のような地形上に集落があると思われる。北橋、富士見村の村界を流れれる橋川以南、横室の西赤坂に至るまで緩やかな傾斜を持つた台地上を道路は貴いている。山地を通る道が平野に出るとき々みられるタイプである。しかし園に示したように水田面から集落は二〇メートルないし三〇メートル高い位置にある。赤城山麓が火山性的土地で乏水地にあることを考へると、生

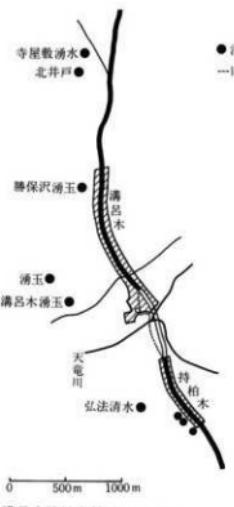
活、かんがい用水などの面からかなり無理な立地であると思われる。大胡町と浅川市を結ぶ県道が米野で沼田街道と交差する。この県道は米野が位置する二〇メートルから二五〇メートルくらいの高さを走っている。県道に沿って集落の立地を見るといすれも谷の水田面の近くか、そこから台地に向かう傾斜面にある。米野だけが完全に台地の頂上部ともいうべき位置に発達している。他の集落が農業集落なのに対し米野が街道の宿という別の立場から作られたためであろう。それにしても飲料水との関連をみればあまり好ましいとは思えない。



舌状台地にある米野宿

れる。主なものは寺屋敷湧水、勝保沢湧水<sup>勝保沢</sup>、溝呂木湧玉、弘法清水などである。乏水性の火山山麓での湧水であり、集落形成の上で大きな意義を持っている。一般に扇状地扇端丘崖下などに集落が発達するのはこれらの地が湧水地であることに起因する。溝呂木、持柏木付近にもそのような集落の発達が見られる。両集落の西、すなわち標高の低い部分、湧水地から下った所である。これに対し街道に沿う両集落は湧水地に比べて標高で二〇~五〇メートルも高い位置にある。これだけ高くなると井戸も相当深くなり、湧水帯という地の利を必ずしも生かしきれない。街道はほぼ直線上に通つているが最短距離をとるために湧水地から下にみられる浸食谷を避けたと思われるふしがある。沼尾川や、水井沢のよう赤城の頂上部から利根への合流まで深い谷を刻む場合を除いて凹凸のある地形をすべてさけている。このことは溝呂木から小川田までと、小川田から長井坂城跡までは今でもほとんど人家のない原と呼ばれる所を利用していることでもわかる。

ではなぜこのような赤城山中腹を通つたか。いくつか考えられるがこれといふ断定材料はない。



溝呂木持柏木付近における  
集落と湧水帯の位置

## I 沼田街道・会津街道の概観

- (一)、この街道は沼田、前橋市間をほぼ直線状に結んでいる。参勤交代の道として使われる以前、軍用道路であつたためとするもの。
- (二)、各宿間の里程が短く、かつ途中にいくつかの川を渡るため移動中の飲料水に事欠かなかった。
- (三)、利根川沿いに行くのが最も低平であるが、綾戸の峡谷を通過できなかつた。また洪水による流失の危険がある。
- (四)、嚴様道といわれるよう参勤交代のためのもので、一般庶民の生活道路は縦横に走っているために、一目的のためだけの道を作ればよかつた。等の理由があげられる。

## II 道の確定

### 一、道の確定

#### 1 前橋から米野宿へ

前橋市本町通り前橋西武デパート辺を西へ向かう。中央通りの商店街へはいり、五〇メートル足らず進み坂を下る。

十字路を左折し片原通りを堅町通り前三百貨店の南へ出る。国道一七号線

となり、これを北上する。五〇メートル程行き、左折すると旧向町通り（平和町通り）にはいり直進する。戦災を免れたので古い家並が続く。一キロ程を進むと広瀬川相生橋際に出る。橋の手前を北上し、少しずつ北西へ向きを変えながら進むと、飛石橋荷束側に出る。街道はさらに北上

し前橋浄水場の東側を過ぎ、上小出町地内、広瀬川の東沿いを通る。上小出町のはずれが三差路となり、右の細い道を進み荒牧町へはいる。この辺りは昔の景観をとどめている。荒牧町の北は再び三差路となり正面に荒牧神社がある。右へ一〇〇メートル程進むと国道一七号線と交差するが、これを横切り五〇メートルばかりの所に日輪寺の門が見える。日輪寺の西を戻るよう左へ折れ、街道は北上するが、この辺りは耕地整理のため旧道はすっかり消滅している。街道は横室の大カヤの西側へ出て、赤城山麓を徐々に上り、

前橋市本町通り



前橋市上小出町三差路（右側が旧道）



米野宿の家並

田口町の東通り米野宿（富士見村大字米野）に至る。米野宿の中央に国道渋川・大胡線との十字路があり、十字路以北は県道前橋・津久田停車場線である。



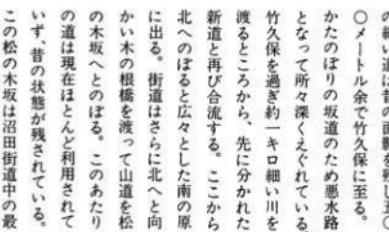
上稻田地内の旧街道



溝呂木の久保屋敷



赤城の上ノ原（六本木から竹久保）



溝呂木の大塚からは雜木林の平坦な道が勝保沢、北上野と一・四キロあまり続く、新道はまっすぐ北へ向かっているが、旧道は右へ曲がっている。この細い道は昔の面影を残し五〇〇メートル余で竹久保に至る。

米野宿の北端から県道沿いに旧道は進む。道はなだらかな上りとなり眼下に利根川、まわりに上州の山々が見渡せる。一・五キロ程進むと北橘村との境となる。その手前が三差路となっており、県道は右へ延びているが旧道は左の細い道にはいり、ほぼ北上し、北橘村上稻田地内に至る。上稻田の鎮守八キロばかりで赤城村大字持柏木内へはいるが、この辺りの旧道はいまは廃道となっている。持柏木の境は六方の道が交差している六道の辻で、ここに磁石型の道標がある。ここより先、持柏木の人家が続き、街道はこの間を

静かなたたずまいが道沿いに並び数年前までは西沿いに用水が流れ、所々に道路面より、一段低い洗い場が残されていた。

## 2 米野宿から溝呂木宿へ

溝呂木宿にはいると、久保屋敷でゆるやかなこう配を北へ進むと家並が昔の姿を残している。数年前までは石だみが敷いてあつたが、現在は生コン舗装となってしまった。一〇〇メートル程で右折すると、本陣跡があり現在は野菜畠となっている。二〇〇メートルも進むと十字路となり、街道は家並の間を直進する。

## 3 溝呂木宿から南雲宿へ

溝呂木の大塚からは雜木林の平坦な道が勝保沢、北上野と一・四キロあまり続く、新道はまっすぐ北へ向かっているが、旧道は右へ曲がっている。この細い道は昔の面影を残し五〇〇メートル余で竹久保に至る。

かたのぼりの坂道のため悪水路となつて所々深くえぐれている。竹久保を過ぎ約一キロ細い川を渡るところから、先に分かれた新道と再び合流する。ここから北へのばると広々とした南の原に出る。街道はさらに北へと向かい木の根橋を渡つて山道を松の木坂へとのばる。このあたりの道は現在ほとんど利用されていらず、昔の状態が残されている。

この松の木坂は沼田街道中の最

大の難所であった。松の木坂をくだると、小川田の追分に至る。追分から岐、屋（木島屋）の横を通って海老坂に出る。南雲宿を左に見、ゆっくりくの字に回る坂をくだると南雲宿である。沼尾川に架かる久保橋は長さ九メートル



南雲宿本陣脇のエーケン坂



永井集落から入原集落の旧道

の土橋であつた。久保橋を渡つて、久保坂にかかると、左側に南雲宿の間屋があつた。坂を上りつめると天王橋で、その橋

沼田街道海老坂

を渡ると辻となり南雲宿の中心である。正面に本陣がある。

#### 4 南雲宿から森下宿へ

南雲宿本陣の東、エーケン坂をのぼると藤木に出る。藤木の東端を通つて北西に折れ、大の沢を越えて輕浜坂、この坂を曲りくねつて鉢沢から今宮に向かつて北東へ進むと今宮の十二宮前に至る。今宮から北西に折れて、ならかな坂を上りつめる。そこから北東へ少し進んで左へ折れ、長井坂城跡の東へ出る。この間旧状をとどめる箇所が所々に見られる。

長井坂城跡より昭和村にはいる。断崖に沿つた水井坂を曲がり下ると永井集落に至る。この坂は現在はほとんど廃道となつてゐる。坂を下りきったところに、大名が休憩した山口家が残つてゐる。この山口家より少し下がると永井坂という流れがあり下永井橋が架かっている。永井坂を北西に向かつて上

り永井集落の舗装道路に出る。長井坂城跡よりこの間約二キロ

である。その道をさらに西へ一〇〇メートルいったところに、



森下宿並

右にはいる無舗装の六尺道路があり、この道が旧街道で往時の面影を残す。この道の坂を下り杉並木の木の下の道を下ると入原集落へ出る。農家の散在する道を行くと三差路に火の見やぐらのある地点に出で、北々西に行くと、右に雲昌寺、左に保育園がある。この間を通つて、下の入沢橋を渡り北に進む。県道

## II 道の確定



桜久保と沼須を結んだ渡舟場



沼田市御馬出し通り四ツ角（手前沼田街道、右折会津街道）



沼田市横塚町国道120号線川場村入口

7 原田集落から花咲・幡谷集落へ

原田から北進むと川場村には  
いり、立岩、星原通り、川湯  
原に至る。  
旧道は北東に少しづつ向きを変  
え、薄根川沿いの山合にはいっ  
ていくと小住温泉がある。この先、  
道は二手に分かれ北へ進む道と東

森下上宿はすでに大森神社が左手にあり、そのわきの県道はやや急こう配な坂で北に向かって細い川が流れている。この小川に架かる橋を渡つて右へ曲り、すぐまた左へ曲る小道が旧街道である。それより県道に出て、北から北東へカーブしていく。三ツ谷三差路を過ぎ一〇〇メートル余り行くと左に小道がある。この小道が旧道で片品川に沿つて一五〇メートル行き、さらに左に折れて五〇メートル、片品川の旧渡し場の地点に至る。

川を渡り沼須町にはいると道は両側に農家を見て一直線に北々西にややゆるいこう配を上り、砥石神社鳥居前に出る。そこから急こう配の道を三曲

な橋・片品線がそのまま旧街道であり、森下宿に達する。森下宿の本陣跡には現在農協がある。さらに進むと三差路となり、右手に高札場跡がある。

### 5 森下宿より沼田へ

りし、沼田市栄町に出る。上りきった所から道はまた北々西に沼田市街地へ向かう。坊新田町も一直線に進むと、本町通りとお馬出し通りの四ツ角に達する。ここで沼田街道は終点となる。

### 6 沼田から原田集落へ

会津街道は沼田市の本町と坊新田町およびお馬出し通り四ツ角が起点となっている。本町通りを北東に進み材木町通りに至り、伊勢屋デパートがある四ツ角を左に曲がる。約一五〇メートルで倉内通りとの四ツ角に出、旧道はここを右折し、原新町通り国道一二〇号線を東北東に進む。倉内通り四つ角より三キロ余り進むと横塚町入口土橋に達する。国道は直進するが、旧街道は北東に曲がり沼田市横塚町をさらに西へ進むと白沢村原田にはいる。

ここで、道が二手に分かれれる。どちらも旧街道で東入り道として利用されていた。北の道へ進むと、主に幡谷や鍊田へ、南へ進むと大原新町より追貝、越本へぬけの街道である。

## 8 原田集落・高平宿から大原新町へ

塩ノ井から東へ一・五キロ余り進むと国道一二〇号線と合流し、高平宿の集落となる。高平宿は古い民家が立ち並び、昔の姿をとどめている。

宿の東はずれから道は二手に分かれ、左の道に進むと、栗生峠越えである。宿から白沢川沿いに上る道で、峠には栗生隧道があり、以前はさらに上の峠を通行していたが、峠を越えた旧道は廃道となっている。この道を進むと大原新町へ通じていた。

高平宿並



高平宿東端（左栗生越え、右椎坂、樺取峠越え）

高平宿のはずれの道を右へ進むと、生枝の手前に出る。そこから左へ進むと、塩ノ井から東へ一・五キロ余り進むと国道一二〇号線と合流し、高平宿の集落となる。高平宿は古い民家が立ち並び、昔の姿をとどめている。

宿の東はずれから道は二手に分かれ、左の道に進むと、栗生峠越えである。宿から白沢川沿いに上る道で、峠には栗生隧道があり、以前はさらに上の峠を通行していたが、峠を越えた旧道は廃道となっている。この道を進むと大原新町へ通じていた。

塩ノ井から東へ一・五キロ余り進むと国道一二〇号線と合流し、高平宿の集落となる。高平宿は古い民家が立ち並び、昔の姿をとどめている。

宿の東はずれから道は二手に分かれ、左の道に進むと、栗生峠越えである。宿から白沢川沿いに上る道で、峠には栗生隧道があり、以前はさらに上の峠を通行していたが、峠を越えた旧道は廃道となっている。この道を進むと大原新町へ通じていた。

「進む道となる。北へ進むと木賊に至り、さらに北上し、曲がりながら東へと向きをかえ、花咲（背嶺）峠を越えて花咲針山に出る。

木賊に觀音堂が建っているが、その裏から東へ上る道があつたが、いまは廃道となっている。この道を上ると千貫峠越えをして先の道と同様花咲へ通じる。

小住温泉を過ぎた地点から東へ向かう道があるが、この道が赤倉峠越えである。赤倉山の南通り、幡谷集落に達する道である。

街道を原田集落へ戻り、南の街道を進むと白沢村塙ノ井に至るが、いまはほとんど廃道になっている。この道を進むと丁字路につきあたり、そこを右折しこの道を進むと左手に幕水四（一八五一年建立の馬頭觀世音がある。そのわきを上ると、雨乞山の南麓沿いを通り田代峠越えをし、幡谷に至る道となっていた。幡谷へぬける道で最も越えやすい峠越えであった。



大原新町並

塩ノ井から東へ一・五キロ余り進むと国道一二〇号線と合流し、高平宿の集落となる。高平宿は古い民家が立ち並び、昔の姿をとどめている。

宿の東はずれから道は二手に分かれ、左の道に進むと、栗生峠越えである。宿から白沢川沿いに上る道で、峠には栗生隧道があり、以前はさらに上の峠を通行していたが、峠を越えた旧道は廃道となっている。この道を進むと大原新町へ通じていた。

塩ノ井から東へ一・五キロ余り進むと国道一二〇号線と合流し、高平宿の集落となる。高平宿は古い民家が立ち並び、昔の姿をとどめている。

宿の東はずれから道は二手に分かれ、左の道に進むと、栗生峠越えである。宿から白沢川沿いに上る道で、峠には栗生隧道があり、以前はさらに上の峠を通行していたが、峠を越えた旧道は廃道となっている。この道を進むと大原新町へ通じていた。

## 9 大原新町から越本集落へ



追貝 国道より旧道入口



片品村越本集落

会津道は宮沢橋北側で沢を下り、国道の右下を通り、東橋の右下で後つ沢を渡つて下貝戸に出る。下貝戸から約二〇〇メートル高谷神社前で左折し、高谷集落内を通り機場で再び国道と合流する。街道は千歳橋を渡つて追貝にはいる。大原新町より追貝まで四・五キロ余りである。追貝内も国道沿いに進み郵便局前から国道と分かれ右へ坂を上つて森山に出る。更に上つて高原へ出ると追貝原であり、一部旧状をとどめている。ここから石上坂を下り駄寄せから千鳥新田へと進む。街道はここから下つて直進し、沢川の土橋を渡る近道と、沢川をさかのばり鉄橋に至る道とがあり、追貝より五キロ余である。ここで沢川を渡り沢川沿いに下る二通りの道があつた。街道はまたバス停切り通しのところで国道と重なる。国道を北上し鉄橋より一・五キロ

口で伊香原集落内に至る。伊香原から左へ坂を下り、片品川を土橋で渡り、対岸の片品村轟谷へ通ずる道路もあつたが、いまは廃道となつていて。

街道は武尊高校前を過ぎ右へ坂を下り、国道と並行して北上し字原前を横切つて立沢へ下る。大立沢を渡ると片品村となり、伊香原から約二キロである。旧道は国道と分かれ右へ坂を上り下平、墓地、菅沼と四・五キロ程進むが、この間はなだらかな高原である。菅沼を過ぎ一キロ程の所から、鎌田へ下る道路もあつた。本街道は鎌田の東の細い道を通り、大滝川を渡り東小川中井に出て国道と交差する。鎌田より約二キロでこの辺りは昔の姿を残している。街道は国道を横切り、千明牧場のある高原を西へ進み、片品川の手前で曲がりくねった急坂を下り川畔に出る。ここから東治いを北へ通じる道もあつたが、街道は細工屋橋のところを渡つて越本へ進んだ。街道は細工屋橋から少し上つて尾瀬に通する県道沼田・田島線と合し、北上すると中里を通る。東小川より中里まで約三キロである。

## 10 越本集落から国境へ

中里から少し坂を上ると土出にはいる。民宿みさわのところから右折し千代田館前を通つて三松橋を渡ると右は開野、左は伊闇町である。旧道はここから川の西治いを進み、伊闇町を過ぎると土出橋を渡り古仲へ入つて右折し、大円寺前に至る。この間二キロ余りである。

「ここより北へ進んで現在りんご園となつてゐるあたりを川の西治いをさかのばり戸倉まで二キロの道は往時の面影をとどめているが、この道は現在通行する者はまれである。土出橋から東治いの道も使われ、旅人は急坂を上つて仙の畠から戸倉へ入ることもでき現在の道路はこの道筋である。

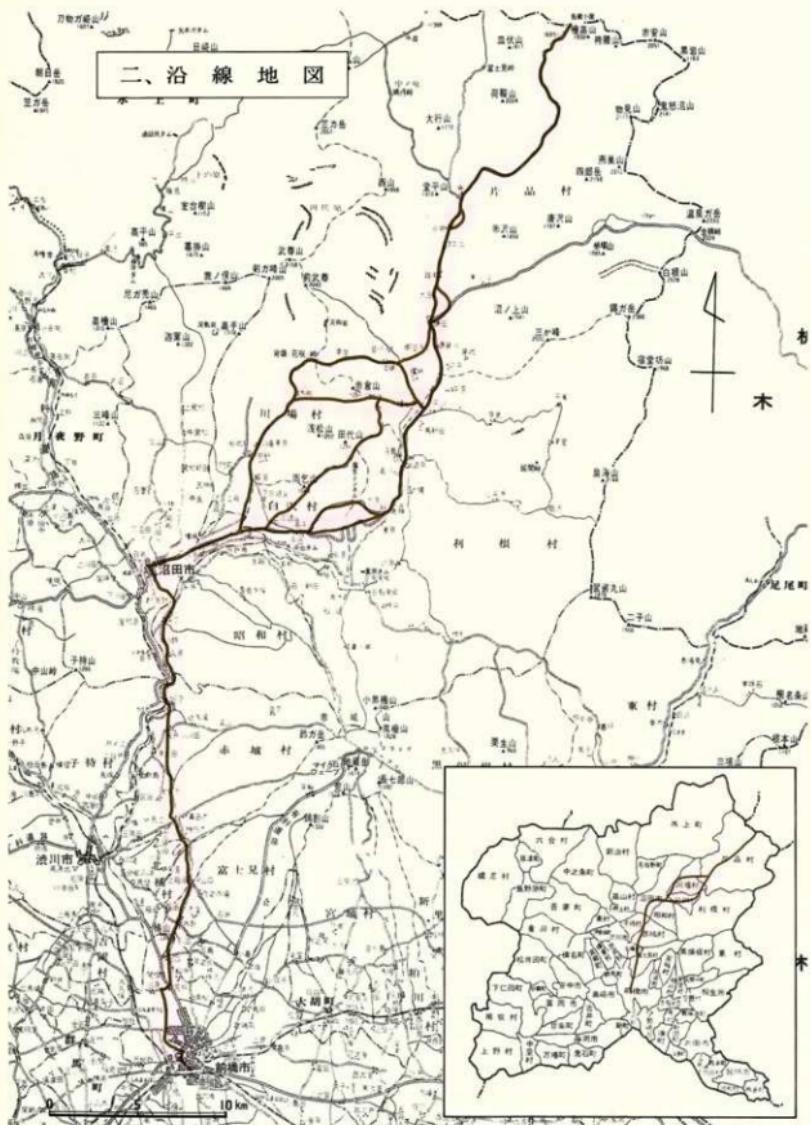
戸倉にはいると武尊神社のあたりから片品川沿いに進み、途中危険な崖道が多い。戸倉より約八キロ程で大清水に着く、現在尾瀬へ行く人々のバスの終点である。ここから一杯清水までぶな林の中を篭を分けて上るが、ここか

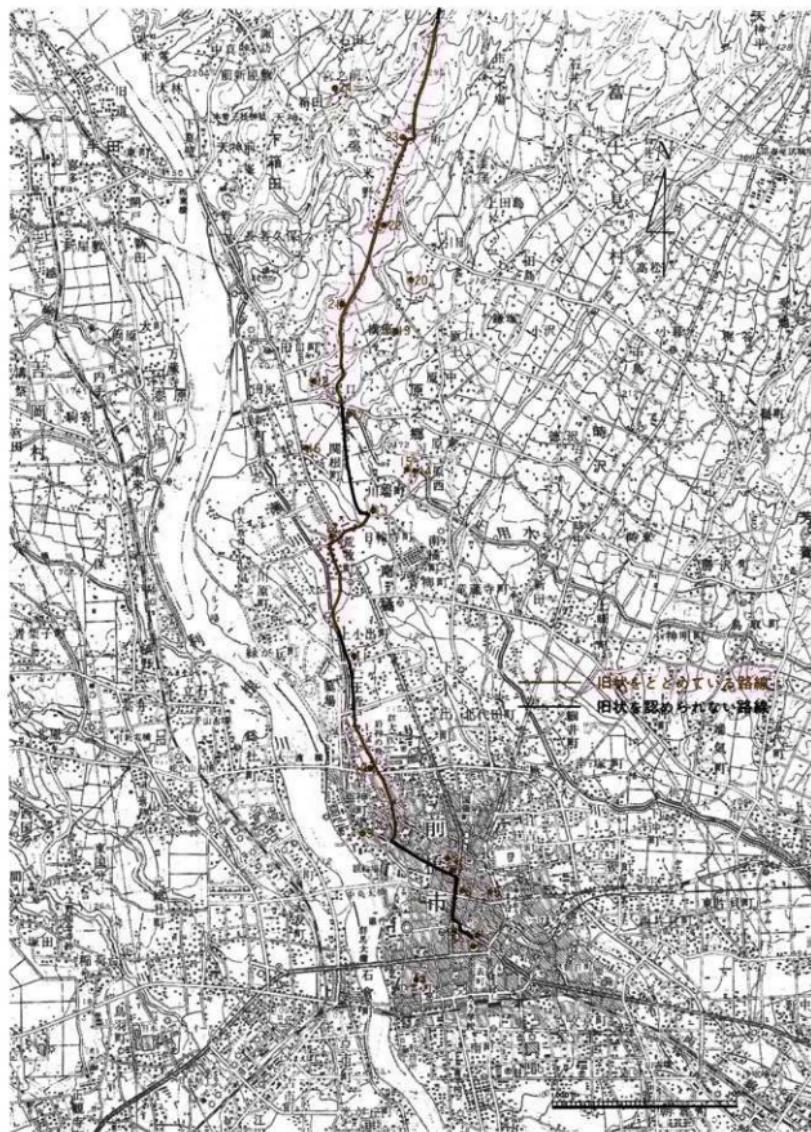


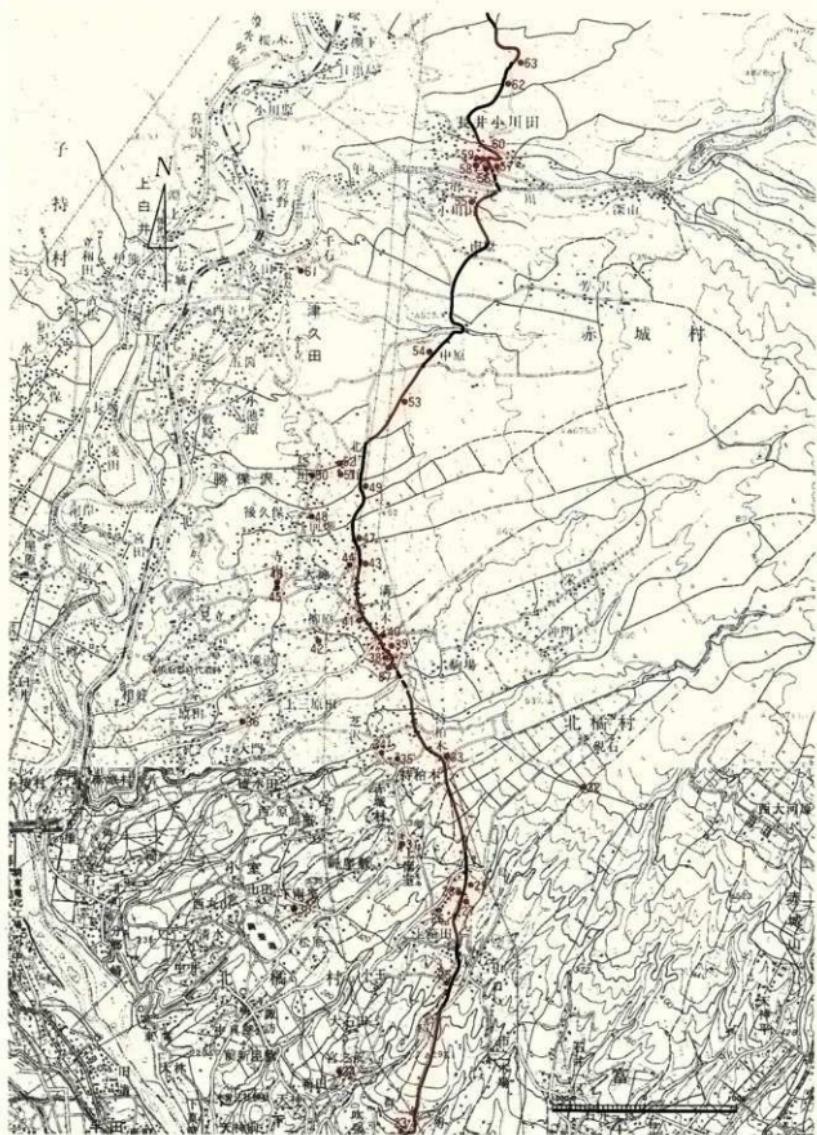
片品村開野田道

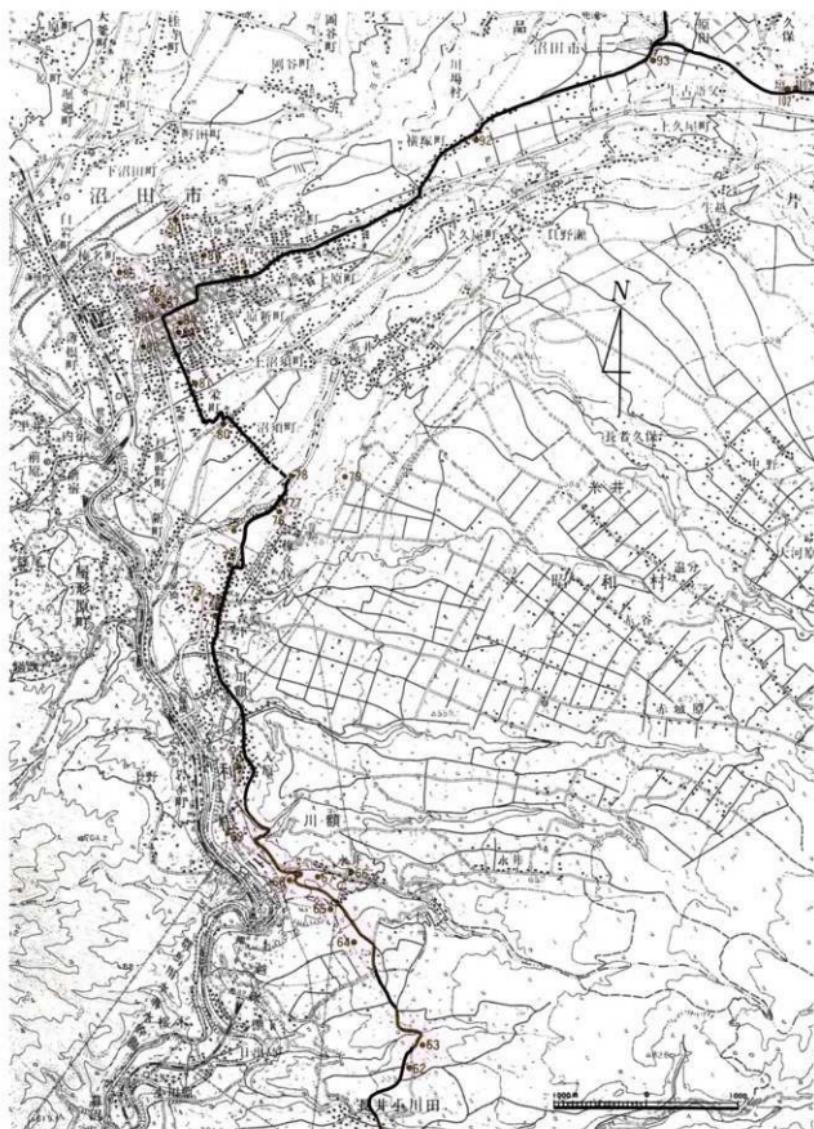
ら坂は急になり林の中を曲りくねつて三平峠へと約五キロ程である。峠付近はオオシラビソ、コメツガ、ダテカンバなどの原生林で、オゼササも密生している。峠を下り尾瀬沼に沿って二キロ進むと群馬と福島の県境に着く。そこに往来する荷物の中継場所があった。街道はここからさらに、沼山峠を越えて会津檜枝岐村へと続いていた。

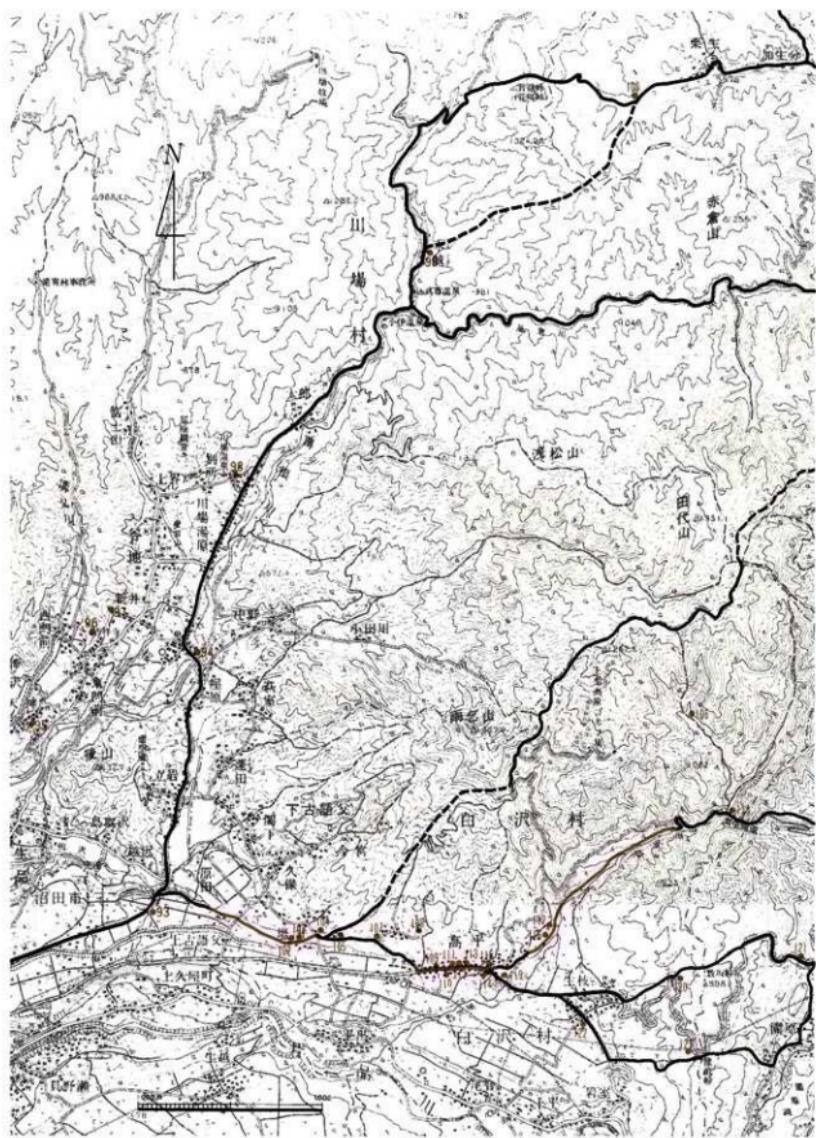
## 二、沿線地図

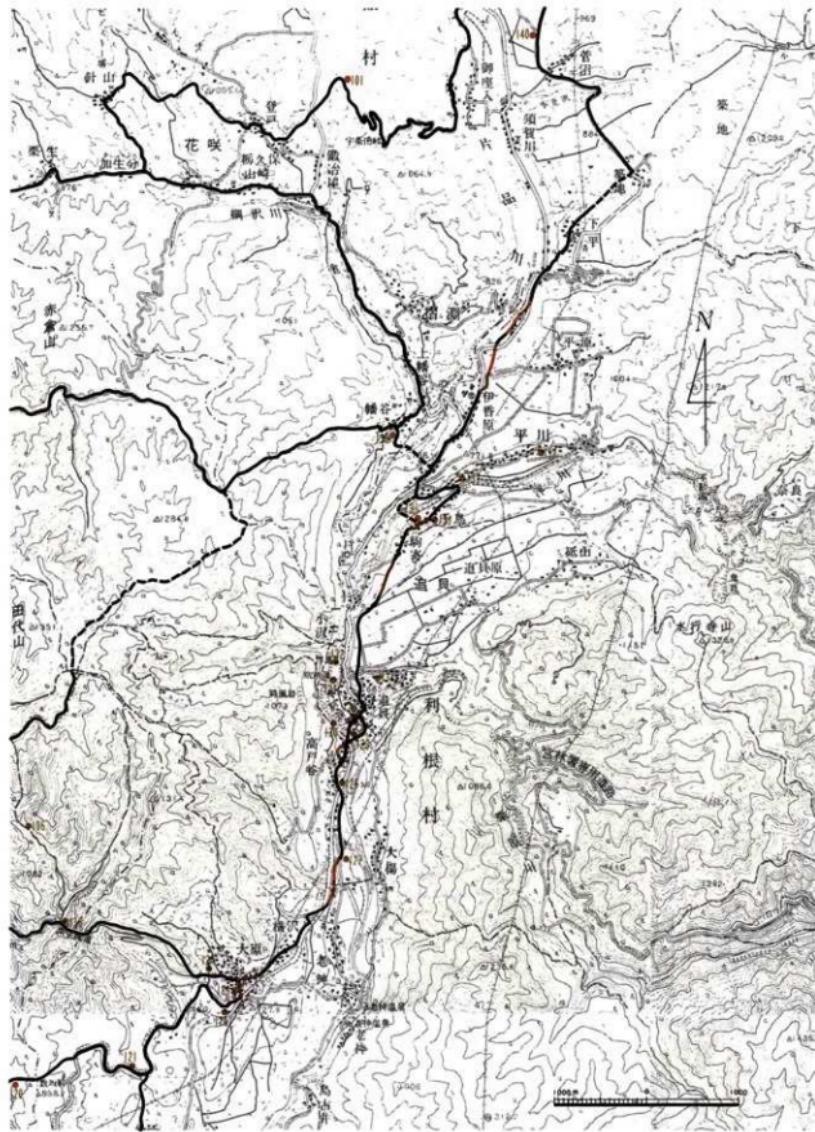


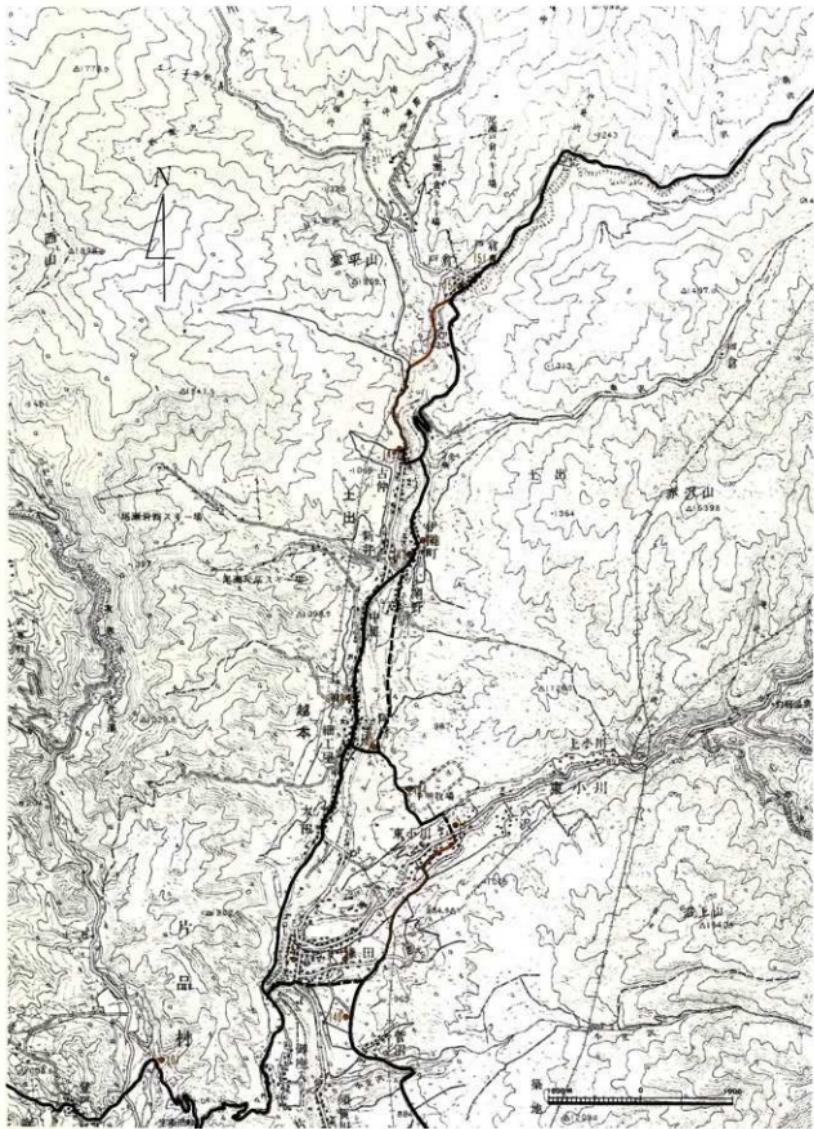


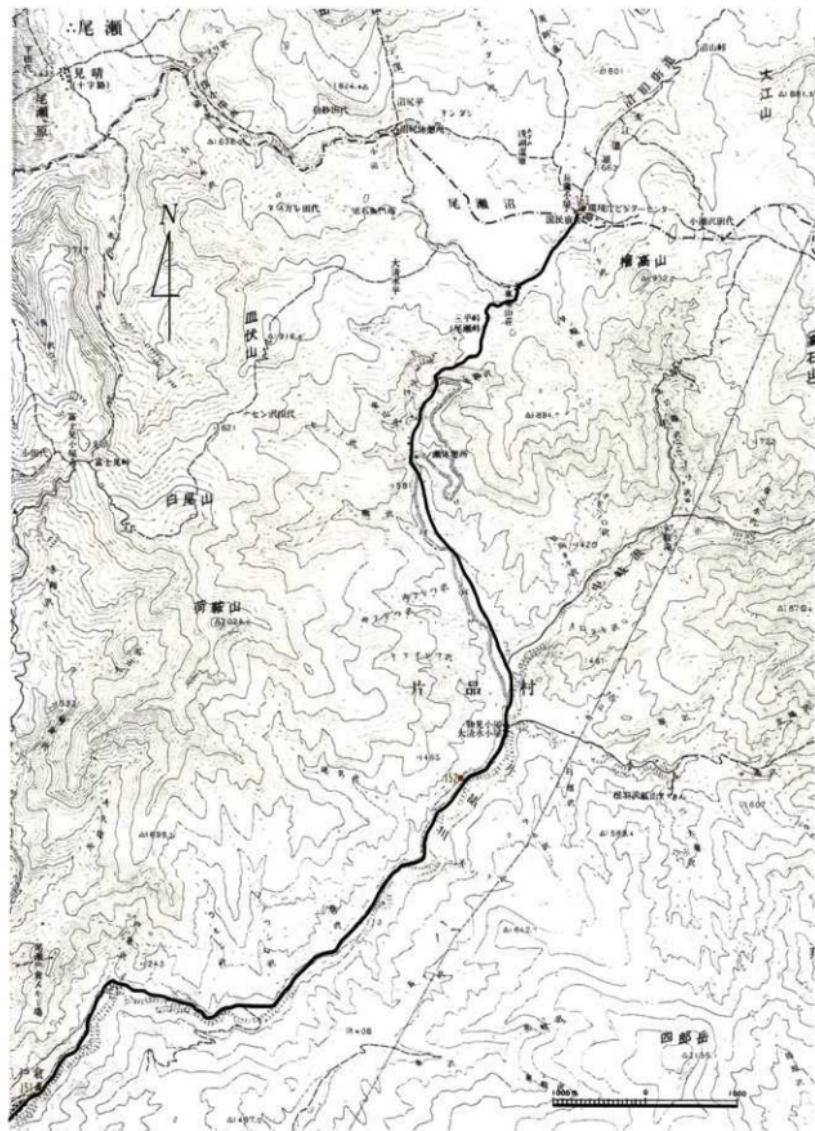














前橋八幡宮



日本最初の機械製糸場跡

前橋城下町の本陣、問屋等は本町にあった。<sup>(1)</sup>したがつて沼田街道の起点は本町通りとするのが妥当であろう。問屋跡、本陣跡等は現在銀行や大會社等のビルがたちならび、昔の面影はない。この本町通りの南田進雀町に八幡宮がある。<sup>(2)</sup>

社殿は古墳上に鎮座している。祭神は菅田別命、前橋の綏鎮守である。維新前は神宮寺が別當寺であった。代々の前橋城主の崇敬厚く、関係文書九通及び伯牙彈琴鏡

<sup>(3)</sup>前は札の辻といい、高札があり、里程基準標があつた。

沼田街道は本町通りを右折し、連雀町の坂を下った。

ここは現在アーケード街となっている。

ここまでは旧利根川氾濫原南岸の台地である。

坂下で左折し片原通りを、堅町通りへ出る。

現在前三デパートの所を右折する。

この通りは国道一七号線であるが、ここには坪呂岩門があり、前三デパー

ト前の十字路以南は城内であった。

堅町通りを北上し、広瀬川を渡る。

この広瀬川の二〇〇メートル程下流に広瀬河岸があつた。<sup>(5)</sup>

酒井氏在城当時は通船で城米等を運んでいた。

松平氏時代は食えたが、嘉

永六（一八五三年）、三川民平が通船を出願し、今の比刀根橋の下流に河岸を

設け、三川河岸とも呼ばれた。

この橋を渡ると細か沢の十字路に出る。その角は、

日本最初の機械製糸場跡である。

国道一七号線はまつ

直に北上しているが、昔はここから北は道ではなく、街

道は左折して、榛名山を真向かいに見て、向町通り（平

和町通り）を西進した。

向町通り北側、五〇メートルほど入ったところに曹

洞宗の櫻谷寺がある。<sup>(8)</sup>

前橋市街地では最も古い寺で、文明七（一四七五）

### 一、前橋から米野宿

## III 沼田街道・会津街道の現状と文化財

は市の重要文化財に指定されている。境内に銀杏の大樹がある。

街道は本町通りを西へ進む。本町通りと交差して連雀町通りがある。この門前は札の辻といい、高札があり、里程基準標があつた。<sup>(3)</sup>

沼田街道は本町通りを右折し、連雀町の坂を下った。

ここは現在アーケード

街となっている。

ここまでは旧利根川氾濫原南岸の台地である。

坂下で左折し片原通りを、堅町通りへ出る。

現在前三デパートの所を右折する。

この通りは国道一七号線であるが、ここには坪呂岩門があり、前三デパー

ト前の十字路以南は城内であった。

堅町通りを北上し、広瀬川を渡る。

この広瀬川の二〇〇メートル程下流に広瀬河岸があつた。<sup>(5)</sup>

酒井氏在城当時は通船で城米等を運んでいた。

松平氏時代は食えたが、嘉

永六（一八五三年）、三川民平が通船を出願し、今の比刀根橋の下流に河岸を

設け、三川河岸とも呼ばれた。

この橋を渡ると細か沢の十字路に出る。その角は、

日本最初の機械製糸場跡である。

国道一七号線はまつ

直に北上しているが、昔はここから北は道ではなく、街

道は左折して、榛名山を真向かいに見て、向町通り（平

和町通り）を西進した。

向町通り北側、五〇メートルほど入ったところに曹

洞宗の櫻谷寺がある。<sup>(8)</sup>

前橋市街地では最も古い寺で、文明七（一四七五）

年、厩橋城主長尾景信が城内金井曲輪に建造したもの。慶安三（一六五〇）年城内より現地に移した。境内の觀音堂は子育觀音として有名である。応永の銘のあるわに口がある。本堂前の一対の銅造仏像は立派であり、石造塔碑も多く建てられている。

この通りが広瀬川辺に出ると相生橋がある。橋を渡って進むと大渡の関所があり、利根川を渡つて群馬郡方面への道であるが、沼田街道は相生橋のたもとで右折して北上し、大渡通り（昭和町通り）を横断してなお北上し、岩神の飛石稲荷の東へ出る。

飛石稲荷は利根川の沖積層の平地に、高さ九・六メートル、最大周囲六〇メートルの巨岩の奇勝である。<sup>(10)</sup> 浅間山から飛んできたとか、上流の片石山の一部が洪水によって流れてきたとの想像説があり、石工がこの岩にのみを入れたところ血がほとばしり出たという伝説もあり、岩を御神体とした稲荷神社である。岩質は赤褐色、縞状の複理石安山岩質溶結凝灰岩、赤城火山の初期、泥流によっておし流されてきたものという。国指定天然記念物となっている。

この稲荷神社の境内には、道祖神の文字塔があり、右

白井沼田・左伊香保高井と道しるべに刻まれている。こ



昭和町の飛石稲荷の飛石



藍沢満無句碑

の道する道祖神は相生橋のところにあったものを移したものと思われる。飛石稲荷の東を北上し、旧前橋市から旧南橋村の上小出となる。この辺は敷島公園の東、前橋上水道のタンクのほとりは発電所のため、広瀬川も地下を流れ、道路も広くなる。上小出地区は、国道一七号線から敷島公園への二線の道路のほか、現在市街化の区画整理工事が進められている。発電所のため広瀬川の土を堤防状に盛土したかたわらを進むと、路傍に石尊燈籠と、藍沢無満の句碑がある。

無満句碑には

庵のみ一はねはねて草の中 九九翁無満

碑陰の篆額は藤森天山の書で、五十数名の蓼園社中（無満門下）の連名が刻まれてある。この碑の北方一〇〇メートルにある墓地の無満の墓碑に

今日きりの日と覚えけり小六月

と辞世の句が刻まれてある。

そこから道はやや北西方へ曲り、一〇〇メートルほど進むと岐路がある。広瀬川辺から分かれて北方向に進むと上小出から荒牧へ入る。荒牧は古くから宿場状の街村でありそのままの北端に荒牧神社がある。<sup>(11)</sup>

荒牧神社の手前に三差路があり、そこに石地蔵があり、台石に右はぬまの道、左は白井道と道しるべに刻まれている。（今はこの石地蔵は南方へ移されている。）

この道しるべや、飛石稲荷境内の道祖神道しるべに刻まれてあるように、前橋からここまで沼田街道と白井道を兼ねていたのである。

白井道は荒牧神社のところから西方に曲り、広瀬川の

III 沼田街道・会津街道の現状と文化財



荒牧町旧街道



荒牧神社前の道しるべ



日輪寺山門

旧利根川の氾濫原であった南橋地区から、赤城山麓の台地である富士見村室へ通じていたことを知る者も少なくなったのが実状である。

そこには横室の大か  
いところを遙んで  
横室の沢口へ出る。  
道はその断崖の低  
いところを遙んで  
そこには横室の大か  
やがある。

県道前橋・原之  
郷四ツ塚線の南、

ほとりを北上し、関根町、田口町を経て桃木川を渡る。片石山、橘山、下箱田城山、真壁城、八崎城の城跡を通つて八崎宿を過ぎ、吾妻川を舟渡して越えて白井の宿へ出たもので、江戸末期から明治初年までは、實際上の沼田街道として往来がはげしかつたが、新道（国道一七号線）ができるからは忘れられた道となつた。この道を地元では旧道と呼んでいる。

荒牧神社の前に角柱の道しるべがあり、「北八崎へ老里二拾四町二十間一尺、南前橋へ老里拾二町廿四間二尺、東米野へ老里八町四拾間三尺、荒牧村」と刻まれてある。この道しるべにあるように、沼田街道は三差路を東へ進み、国道一七号線を横断して桃川小学校の前を過ぎ、桃木川に架けられた橋を渡り日輪寺の西へ出たのである。

この日輪寺は山号を朝天山といい、真言宗豊山派で前橋市日輪寺町地内にあつた。この道しるべにあるように、沼田街道は三差路を東へ進み、国道一七号線を横断して桃川小学校の前を過ぎ、桃木川に架けられた橋を渡り日輪寺の西へ出たのである。

日輪寺の境内には觀音堂がある。本尊の十一面觀音像は俗に蛇彌形と称する丸刀彌りのもので、群馬県の重要文化財に指定されている。狩野元信作の絵馬等が所蔵されている。仁王門もあり境内には庚申塔数基、木村松太郎頌徳碑、天野桑古句碑等がある。ここに、自然石に左ぬまた、右おふこと刻まれた道しるべがあつたが、いまはない。

沼田街道は、日輪寺町の菅原神社のところから五〇メートルほど西へ進み、桃木川の左岸を北西方へ進み、川端町の西端で細か沢川を渡り、関根町の北東端を過ぎて富士見村横室の沢口へ出たのであるが、明治四十三（一九一〇）年の水害によって細か沢川が氾濫し、その後耕地整理をしたため、日輪寺から沢口の間は昔の街道の面影は全くなくなつた。道路も馬で運搬する時代の耕地整理であるため、幅員も狭く、街道としての機能を失つてしまつた。国道一七号線の開通により、この道を通る者もなく、沼田街道が日輪寺から横室へ通じていたことを知る者も少なくなつたのが実状である。

本尊は不動明王・高野山竜光院の末寺で、嵯峨天皇の弘仁二（八一一年）、空海の高弟、惠惠和尚が教旨を賜つて開基したと伝えられる古刹である。嵯峨天皇の御宸筆といわれる祈福院と記した勅額を所蔵している。



横室沢口の旧街道

大正用水路のはとり。樹令千年以上と推定され、まれに見る巨木である。国指定天然記念物となっている。附近に徳本念佛供養塔、不動堂境内に青面金剛像、拝志庄横室村と刻まれた青面金剛塔、道祖神文字塔その他がある。

この付近の道は昔の街道の面影を残している。

大かやの西方で、県道前橋・原之郷四ツ塚線、大正用水路を横断すると、舗装された村道は北東方へ向かっているが、旧街道は分かれ、北西方へ田んぼの中を進む。耕作関係者だけが通る作場道のすがたである。赤坂橋で法華津を渡ると旧街道は田口と横室の境界を北上するのであるが田口・米野線と、田口・横室線の舗装道路の三差路までの間はほとんど人の通れぬ廃道と化して、豪雨の際の放水路となってしまった。

田口・米野線は旧街道を拡幅舗装している。<sup>(2)</sup>通りの西側に前橋から政淳寺が移転新築されて墓地には萩原朔太郎の墓がある。道の東の広い桑畑が庄司原で、礎文時代の遺物包藏地として早くから知られ、古墳群もあり、文明九(一四七七)年、荒牧まで進出した長尾景春の軍と太田道灌の軍が、対陣したところとして知られている。政淳寺の北方一〇〇メートルの地点から、村道原上・米



大聖寺如意輪觀音



横室の大カヤ



横室と田口の境界旧街道

野線の合流する地点までは松並木であつたが戦時中伐採されてしまった。

大聖寺から以北が米野宿である。

この大聖寺は天台宗で米野宿の南端にある。門前に百番供養塔二基、大乗妙典供養塔二基、庚申塔、宝篋印塔、

双体道祖神、元禄七(一六九四)年の大日如来、安永七(一七七八)年の高遠石工伊藤重昌の如意輪觀音等があり、本堂前には元禄十(一六九七)年の六地蔵六觀音がある。

米野宿の中央に県道渋川・大胡線との十字路がある。ここまでは村道田口・米野線であるが、

田口・米野線は現在県道前橋・津久井停車場線である。  
十字路以北は現在県道前橋・津久井停車場線である。  
米野宿は東は吾嬬川、西は千早川の谷がある古地のりょう線上の南北に通

#### 四 沼田街道・会津街道の現状と文化財

する沼田街道にあり、約八町にわたり街村を形成して、宿の南北には松並木があつた。

中世までは、ここにはほとんど人家はない、沼田、厩橋（前橋）を拠点として争った、上杉、真田、滝川、北条等の進軍用路としてできた道を、近世に参勤交代制がしきれ、沼田藩主の公用路の宿場としての町割がなされたものであろう。

地形の関係で水がないため、遠くから吾嬬川を通し、その両川に沿って宿が形成された。

宿の北端に本陣蛭川家があり、その西に脇本陣栗原家がある。

間屋は入札（選挙）によつて中島家、柳井両家及び本陣蛭川家等が交替したようである。

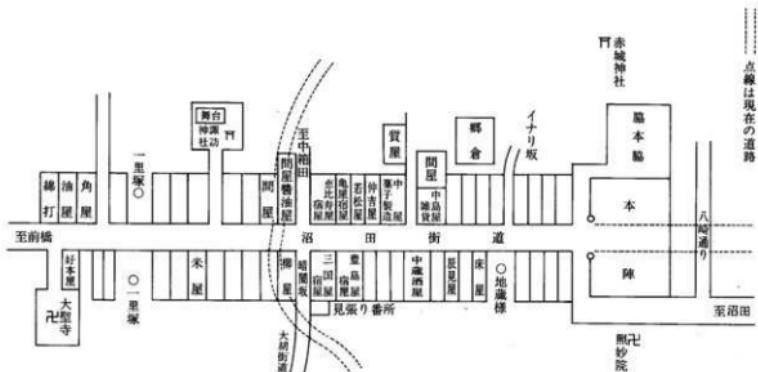
宿のほか中央に大胡、八崎への十字路があり、その附近に宿屋や商店等が軒を並べていた。十字路附近には見張り番所があり、この街道を通行するものの取締りをした。

沼田、前橋間の交通が西通り（国道一七号線）へ移つてから米野宿は衰微の一途をたどり、いまは屋号は残つてはいるが、ほとんど農家となつた。

等であった。	業	商業	貨物	旅館	酒造業
	三	二	五	二	一
大	萬	子	製造業	醸油	醸造
工	星				
二	一	一	一	一	一
龍	馬	石	切	絞油	業
作	喰				
リ	職				
一	三	二	一	一	一

米野宿は地形上地下水が低く、深井戸で井戸の数は少なく、ほとんどが共同井戸であった。宿を流れる稻野川は生活用水として貴重なものであった。

なるのが例であり、南端の風下にある大聖寺は一八年間に三回も火災にあつ



米野宿岡

た記録がある。明治十四（一八八

一）年の大火により、宿の大部  
分が焼失してしまったため、古い形

態をこす民家は残っていない。

宿場の川は道の中央を流れている  
のが通例であるが、稲野川は道路

の西側を流れている。

米野の宿に「里塙」があった。前

橋から二里的地点であろう。

見張り番所では毎日近村から交

替で、村役人一人、人足四人が出

勤して、これを通る旅人の住所、  
氏名、行先、目的等を調べた。万

延二（一八六一）年二月二十三日から同年三月二十八日迄の「旅人改帳」に

よると、ここを通った旅人は次のようである。

一番多いのは越後の者で三〇人、次に沼田・利根郡地方の者で一八〇人、  
吾妻・北群馬地方の者七五人、東上州の者五四人、武州から四三人、下野、  
常陸方面の者三九人、佐位伊勢崎方面が二三人、群馬郡高崎方面の者二人、  
前橋は少なく二人、奥州の者四人、その他遠国の者八人であり、勢多郡の  
者（これは中通り以外の者）四九人であった。

越後の人が多いことは、三国街道を通り、下新宿から赤谷川沿いに沼田  
へ向かい、沼田街道を通ったものと思われる。奥州の者がわざか四人である  
ことは、会津街道から沼田街道へ出すに、根利から大間々方面へ出るか、赤

城山越しの道が選ばれたものと思われる。

旅人の行先は、江戸・越後、前橋、沼田が断然多いものであるが、神社や仏  
閣への信仰の参詣者と温泉地への湯治客も多かつた。



米野の道祖神と馬頭観音

産泰様へ安産祈願

伊香保へ湯治

椿名山へ参詣

上野十二社参拝

日光山参詣

草津へ湯治

沢渡へ湯治

太田春龍參詣

柏木福井

河内大明神

石山觀音

總社明神

秋父三峯

沼田三峯

二人

二人

一人

宿場では旅人が馬や人足、駕籠等を必要な場合は、先触れがあり、それを  
次の宿場まで継ぎ送らなければならない。米野宿では前橋から来たものは溝  
呂木へ、溝呂木から来たものは前橋のそれぞれ問屋へ引き継ぎの人足を出し  
た。江戸末期のこの触れ持ち人足貨は、米野から溝呂木までが四五文、前橋  
までが七〇文であった。

先触れの一例を示せば次のようである。  
一本馬 七足  
軽尻 忠定  
先 状 觉

越後五日町から前橋への先触れには次のようなものもある。

右者(同)通り魚沼郡五日町駅、当二七日四ツ時出立上州水井駅迄夫沼田駅迄  
前橋迄經越候間、書函馬無達津御差出可被申候、尤相対貢錢相私可申候、以上

慶応式歲四月廿六日

越後五日町 安達慎五郎

右宿々問屋中

泊り附

四月廿七日

開宿

三ツ又

同廿八日

浅貝

同廿九日

須川

同二日

沼田

これによると上州路へ入ってからは須川と沼田で泊り、前橋へ着いている。

姫橋宿

廿一日

深谷宿

廿二日

桶川宿

廿四日

板橋宿

廿五日

右之通本陣差合茂有之候ハハ諸書附札致印影順達可給候、若差合茂有之候ハハ  
駕本陣或共差合頼入候、此駕状早々順達給板橋宿於江戸栗田物右衛門柔野彈右  
衛門方江相届可給 以上

十一月三日

土岐山城守内

田村忠太夫

森下宿

五科通り

板橋宿迄

候以上

これによると、先駆れは二十日前に出されている。本陣等では大名の休み

や泊りには準備が必要であったためであろう。また、米野の本陣であった蛭

川家には、黒田大和守の泊りと休みの宿札が残っている。沼田から江戸への

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財

第一日の泊りは米野か前橋の本陣であった。  
米野宿では、三国街道方面から東上州方面への横道もあった。沼田街道の宿場のうちでは、米野宿が一番の交通の要路であったといえよう。

#### I 前橋から米野宿へ

No	名 称	年 号	備 考
前橋本陣跡	前橋市本町通り		
八幡宮	前橋總鎮守		
大手門跡	札の辻		
龍海院	酒井氏累代の墓		
広瀬川河岸跡	(三川河岸)		
妙安寺	梵鐘 県指定重要文化財		
機械製糸場跡	日本最初の機械製糸場跡		
橋林寺	子育観音、石造仏		
大渡閣所跡	岩神町内地		
飛石橋荷	国指定天然記念物 道祖神の道標		
香集寺	鎌倉長寺の末寺、本尊聖観音		
荒牧神社	芭蕉句碑二基		
日輪寺	沼田街道と白井道の岐路にある芭蕉句碑		
原之郷のさんご樹	國指定重要文化財 頂上に赤城神社 千庚申		
船津伝次平の墓	十一面觀音像 県指定重要文化財		
金剛寺の庚申塔	県指定天然記念物		
横室歌舞伎衣装	県指定史跡		
横神社・福守様	国指定天然記念物		
十二山	国指定天然記念物		
政淳寺	県指定重要文化財		
大聖寺	千庚申		
米野本陣跡	千庚申		
作・高遠石工 伊藤重昌			
蛭川家			
石仏群			
安永七年	承応四年		

## 一、米野宿から溝呂木宿へ

米野宿は赤城南麓と西麓を結び、山地から平地に移る交通の要所となつてゐた。ここを通り過ぎると、道幅七・二メートル道敷三・六メートルの松並木となつていて、宿から一・五キロ程進むと木台地のりょう線に出る。右に赤城山麓を、左には榛名、子持の山が連なり、遠くはるかに三国の山波がかすんで、眼下は利根川が帯の如く上州の野を悠々と流れている。正面に赤城山を望みながら北東へ進むと、点々と残る旧道となる。新道と分かれ左折すると、富士見と北橋村の村界を流れる橘川を渡って、ゆるやかな小坂となる。坂の中程左に、新井の清水があり、岩間からこんこんと清水が湧き出している。この所は、旅人達にとっては湯をいやしてくれるよい憩いの流れであつたろう。

この小坂を上れば、上箱田の樅田・中屋敷で人家が並んでいる。この所で、右へ行けば山口を経て石井から大間々の道となり、左は真壁、八崎を経て白井道となる。

沿田街道は北へ直進する松並木道であつた。そこには周囲一・五メートルから四メートルの老松が幅三・六メートルの道の両側に生いしげついていた。並木の終る所は浅井で、上箱田の鎮守神明宮がある。

神明宮は街道の東側丘陵<sup>(4)</sup>にあって、樹合数百年の老松が數本、本殿の背後に高く茂っているからすぐ知られる。社殿は本殿と拝殿で大正四(一九一五)年改築し境内には墓舍所もある。

街道は神社の西を通つて北進し、小さい坂を越えて上南室の上ノ原と東大道の境界に出る。街道沿い上箱田地内に円空仏がある。<sup>(27)</sup>近くの墓地を大正十三(一九二四)年に整理した時、お堂に安置されていた仏像を持帰つて持仏堂に保管した。この像は、困つたことがあれば望みを



上箱田円空仏

かなどえて、口をきいたり、口教えたりする  
にカンソノンさまと呼んでい  
た。御本像は  
杉丸太をナタ  
で割り前面を三角形に割つて、側面を波形に切込み、表の一部にノミをふる  
つている円空仏独特の手法である。

本像 縦高 一三・一センチ 最大幅 二・四センチ

本像が円空の行脚コースを知る極めて重要な文化財である。

街道西二〇〇メートル程に常樂寺の舞台がある。<sup>(28)</sup>常樂寺の舞台と呼んでいる庵寺跡の北隣に牛頭天王の石祠がある。銘に奉造立祇園牛頭天王。当村から四メートルの老松が幅三・六メートルの道の両側に生いしげついていた。所には天明六(一七八六)年九月、天明元(一七八一)年から三年にかけて、浅間山の大爆発や冷害が続いたので、村中をあげて悪病退散、家内安全、五穀豊作を祈念するため、世良田の牛頭天王を勧請したのだという。同所には天明三(一七八三)年建立の石経供養塔がある。石工は信州高遠の伊藤新助と刻まれてある。

この常樂寺の舞台北西には赤城神社<sup>(29)</sup>がある。

赤城山大洞の赤城神社に合祭したが、昭和二十二(一九四七)年に分祭した。社殿は大正十三(一九二四)年再建。境内に文久一年(一八六二)年創請の上野十二社の石祠が並んでいる。参道の左側に

○なほ見たし華に明けゆく神の垣  
○ふるさとやすれがたみの八千代草  
の二つの句碑が残されている。

芭蕉  
士云

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財

上ノ原の街道の左側に、三平方メートル程の小高い荒地に、弘化三（一八四六年）に建てられた日念佛供養塔がある。村の人は「てんとうさま」と呼んで時々供養をしている。ここを北へ少し行くと、道の右側に同じ位の広さで小高い塚がある。元禄十（一六九七）年の庚申供養の青面金剛像と元禄十一（一六九八）年の地蔵尊仏供養鉢の地蔵尊が一起に建っている。このあたりは台地の後継を街道が南北に通じてるので、道路の欠損もなく昔の道がやや拡張されただけで舗装され、村道として利用されている。もし、一里塚があったとすれば、この附近ではなかつたろうか。

この境界を北へ直進して庚申下に出で、赤城村持柏木となる。この間約一キロ道幅七メートルに美しい松並木が続いているといふが、明治から大正にかけて姿を消して街道の修理もなく悪水の流れるままに放置されていたので、二メートルから三メートルの深い堀となり、上ノ原一帯の悪水路となつていて。その路肩に古い並木の切株が姿を見せて、過ぎし昔の夢をしのばせている。

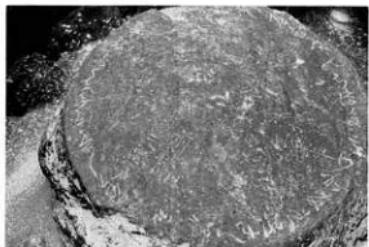
上南室と持柏木の村境は六方の道が交錯している六道の辻で、道の東側には庚申塚があり庚申塚の道しるべとなつていて。

六本の道が交錯している辻の中央に埋められてあつた磁石型の道標である。表面が平たい円形の安山岩に、六方への行先と道のりが刻みこまれて、まわりにぐるりと道歌がある。

- 北 沼田 五里半 ○東 赤城 三里半
- 南 前橋 一里半 ○西 高崎 六里
- 南 前橋 一里半 ○西 高崎 六里
- 南 前橋 一里半 ○西 高崎 六里
- 北 沼田 五里半 ○東 赤城 三里半
- 南 前橋 一里半 ○西 高崎 六里
- 南 前橋 一里半 ○西 高崎 六里

心しむかにたづねぞゆけ

と記され、旅行人達に喜ばれていた。数年前に道路拡張工事のため北側の



庚申塚の道しるべ

道上に移動して、赤城村指定文化財となり保護されている。

庚申塚を過ぎると、持柏木の人家が続いており、この人家の間を街道は通つていて。

街道の西側五〇〇メートル程の所に、弘法湧水がある。<sup>(34)</sup>久保地に枝ぶりの整つた赤松の下、岩間に

らきれいに澄んだ水がコンコンと湧き出して小さい水たまりを作つていて。大昔、一人の旅僧が草い

きれる野道を金剛杖を頼りにタビタドと歩き続けて、やつと、小

さな丘にたどりついた。前方の凹地に柏の木が見えた。急いで近寄つてみると、程よい影を落している根元に清らかな水たまりがあつた。旅僧は早速白衣をぬいで、柏の木にかけて裸となり、湧水を浴びて旅の塵を流した。さつぱりした旅僧は身も心も清浄となつて、精気がみなぎり元気を回復した。再び、わらじのひもを引き締めて網代笠をかぶり、いすこともなく行脚の旅に立去つていった。その時に、次の歌を詠んで残した。

湧き水にあつさをしのぐ旅衣

しばし休まん持てや柏木

それから、幾世代を経て、昔も今も変りなく、この湧水は湧き続けて、村里をうるおしてくれる所以で、誰いうとなく、湧水を、弘法の清水。と呼び、この村里を持柏木と称するようになつたという。

近くには歌舞伎舞名の残る赤城神社も見られる。<sup>(35)</sup>

街道は北進し、持柏木の集落をぬけ、県道は右へ曲がるが、街道は直進し



弘法の清水



諏訪神社の大けやき



溝呂木家並

久保星敷を北進して宮ノ前に出ると、鎮守諏訪神社、御木の。諏訪神社の大けやき。(県指定天然記念物)が樹令千年を誇って大空高くそびえ立っている。<sup>(38)</sup> 境内の北角に石造彫刻の優美な常夜灯が建っている。ここを過ぎて程なく十字路になる。このあたりは、昔はかなりにぎやかな活気のある一帯であった。溝呂木宿の問屋(狩野家)を始め山根屋、千歳屋、山市屋、白木屋、大正屋、角屋、向屋、桶屋、左官屋などの店舗が並んで、酒、日用品、煙草、塩、米穀、雜貨、豆腐などを販売していた。駄道の久保には呉服太物、小間物店の中島屋があり、旅人相手の飲み屋のはま屋。などもあった。問屋は狩野屋と改めて商業を続けたが、明治末期にやめた。この宿の中程に天台宗大運寺があつて、東叡山寛永寺直末で高い寺格であつたが、住僧に人を得ないので、明治二十七年同宗興禪寺に合併した。寺の地続きに旅籠屋、油屋、桶屋、伊草道場など街道の両側に並んで酒類、煙草、荒物、雜貨類を商っていた。ここには、溝呂木宿のもう一軒の問屋(木暮家)があつて、主として白井宿との往来にあたり、明治初期に帰農して小鳴屋(酒、煙草、荒物)を分家した。

老人達は「このあたりを六文原<sup>(39)</sup>と呼んで、六文原を通う酒の味は格別だつた」と話している。この宿場は台地上にあるので水利が悪く、冬から春にかけての空ツ風と火事に常におびやかされていた。  
溝呂木宿は持柏木の北峰から向かいに出で、天竜川を渡り久保屋敷に入る。久保屋敷のゆるやかなこう配を北へ直進する道沿いの家並と石だみの坂に昔の姿が残っている。現在は石だみの上に、生コン舗装がしてある。この坂を通り、間もなくして右折すると、左側に溝呂木宿の本陣跡がある。当時の屋敷構えが残って野菜畑となっている。後裔狩野家は同村の駒場に移転した。東隣は歴代南雲金左衛門を襲名してきた豪農南雲家である。

久保星敷を北進して宮ノ前に出ると、鎮守諏訪神社、御木の。諏訪神社の大けやき。(県指定天然記念物)が樹令千年を誇って大空高くそびえ立っている。<sup>(38)</sup> 境内の北角に石造彫刻の優美な常夜灯が建っている。ここを過ぎて程なく十字路になる。このあたりは、昔はかなりにぎやかな活気のある一帯であった。溝呂木宿の問屋(狩野家)を始め山根屋、千歳屋、山市屋、白木屋、大正屋、角屋、向屋、桶屋、左官屋などの店舗が並んで、酒、日用品、煙草、塩、米穀、雜貨、豆腐などを販売していた。駄道の久保には呉服太物、小間物店の中島屋があり、旅人相手の飲み屋のはま屋。などもあった。問屋は狩野屋と改めて商業を続けたが、明治末期にやめた。この宿の中程に天台宗大運寺があつて、東叡山寛永寺直末で高い寺格であつたが、住僧に人を得ないので、明治二十七年同宗興禪寺に合併した。寺の地続きに旅籠屋、油屋、桶屋、伊草道場など街道の両側に並んで酒類、煙草、荒物、雜貨類を商っていた。ここには、溝呂木宿のもう一軒の問屋(木暮家)があつて、主として白井宿との往来にあたり、明治初期に帰農して小鳴屋(酒、煙草、荒物)を分家した。

老人達は「このあたりを六文原<sup>(39)</sup>と呼んで、六文原を通う酒の味は格別だつた」と話している。この宿場は台地上にあるので水利が悪く、冬から春にかけての空ツ風と火事に常におびやかされていた。

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財

No	名 称	年 号	備 考
木曾三柱神社 新井の清水舞台 常樂寺の舞台 円空仏 日天念仏供養塔 庚申供養塔	北橘村上箱田歌舞伎舞台	弘化三年	本像 總高一三・一センチ
赤城神社 赤城神社 石	元禄一〇年	芭蕉句碑二基	縦横一メートル程の大石、親附上人の の伝承がある
磁石道標 弘法清水 赤城神社 上三原田歌舞伎舞台	内型で六方の方向が示されている 持柏本地内 歌舞伎舞台	元禄一〇年	芭蕉句碑二基 縦横一メートル程の大石、親附上人 の伝承がある 内型で六方の方向が示されている 持柏本地内 歌舞伎舞台
文政 二一年	国指定重要有形民俗文化財		



## 溝呂木の宿場（明治～大正初期）

三、溝呂木宿から南雲宿へ

満呂木の大塚から再び松並木街道が始まっていた。道幅七・二メートル道路三・六メートルの広い道路となっていく。大塚から勝保沢の堂ヶ久保を曲がり折れて北進する。この辺は椎木林の平坦な道となっている。街道の南側に戦国時代、斎藤加賀守安清の居城で北側は深い渓谷、東西南の三方が開けた数条の滝がめぐらしている。白井城主長尾氏に属して、利根東回り十騎に數ヶ所の滝がある。

東西南の三方から開け  
利根東回り十騎に數  
えられて、常に勇名  
をはせ敵陣を恐れさ  
せていた。快中山宗  
玄寺が城の一部にあ  
(45)  
る。

宗玄寺は柳原源房  
代村大中寺末。元和  
八(一六二二)年勝  
保沢城主齊藤加賀守  
が開基、双林寺の先  
住存策大和尚を開山  
として創建。天保年

42	41	40	39	38	37
満呂木本陣跡	満呂木本陣跡	満呂木本陣跡	満呂木本陣跡	満呂木本陣跡	満呂木本陣跡
諏訪神社のケヤキ	諏訪神社のケヤキ	諏訪神社のケヤキ	諏訪神社のケヤキ	諏訪神社のケヤキ	諏訪神社のケヤキ
満呂木間屋跡	満呂木間屋跡	満呂木間屋跡	満呂木間屋跡	満呂木間屋跡	満呂木間屋跡
大蓮寺跡	大蓮寺跡	大蓮寺跡	大蓮寺跡	大蓮寺跡	大蓮寺跡
満呂木間屋跡	満呂木間屋跡	満呂木間屋跡	満呂木間屋跡	満呂木間屋跡	満呂木間屋跡
湧玉	湧玉	湧玉	湧玉	湧玉	湧玉
狩野家	狩野家	狩野家	狩野家	狩野家	狩野家
経定天然記念物	経定天然記念物	経定天然記念物	経定天然記念物	経定天然記念物	経定天然記念物
狩野家	狩野家	狩野家	狩野家	狩野家	狩野家
歌舞伎舞台	歌舞伎舞台	歌舞伎舞台	歌舞伎舞台	歌舞伎舞台	歌舞伎舞台
木暮家	木暮家	木暮家	木暮家	木暮家	木暮家
水井城主の墓	水井城主の墓	水井城主の墓	水井城主の墓	水井城主の墓	水井城主の墓



快中山宗玄寺 宝瓶印塔



赤城登山一ノ鳥居

間、火災のた  
め焼失して、  
十八世梵龍和尚が再建した。  
昭和二十八年(一九五三)、  
年本堂を瓦葺きに、その後  
庭園を整美し  
た。境内には齊藤賀守の墓石や  
石本勝左衛門勝辰の建立した観音  
堂、宝瓶印塔が見られる。  
宗玄寺境内に出世観音堂がある。  
この堂は享保の頃、勝保沢の百  
姓齊藤惣作が江戸に行き刻苦精勤  
して、ついに酒井藩の勘定方に出  
世した。そこで、なつかしの故郷に  
報恩のためと氏神諏訪神社には  
大鳥居、村を離れる際に祈念した  
観音様には御堂を新築奉納したも  
の。観音堂は間口一間半・奥行三  
間半・唐破風造銅板葺きで壮大で  
はないが彫刻の美、木椎の精巧を極めて、同村の大工星野幸右衛門によつて  
見事落成した。時に寛政十(一七九八)年五月であった。この堂は近郷にま  
れた建築物である。

街道を西へ進むと勝保沢地内に赤城登山道もあって、寛政九(一七九七)

間、火災のた  
め焼失して、  
十八世梵龍和尚が再建した。  
昭和二十八年(一九五三)、  
年本堂を瓦葺きに、その後  
庭園を整美し  
た。境内には齊藤賀守の墓石や  
石本勝左衛門勝辰の建立した観音  
堂、宝瓶印塔が見られる。

宗玄寺境内に出世観音堂がある。

この堂は享保の頃、勝保沢の百  
姓齊藤惣作が江戸に行き刻苦精勤

して、ついに酒井藩の勘定方に出  
世した。そこで、なつかしの故郷に  
報恩のためと氏神諏訪神社には  
大鳥居、村を離れる際に祈念した  
観音様には御堂を新築奉納したも  
の。観音堂は間口一間半・奥行三  
間半・唐破風造銅板葺きで壮大で  
はないが彫刻の美、木椎の精巧を極めて、同村の大工星野幸右衛門によつて  
見事落成した。時に寛政十(一七九八)年五月であった。この堂は近郷にま  
れた建築物である。

この街道の西一・五キロ程の所に、敷島のキンメイチク(国指定天然記念  
物)、桜森のひかんざくら(県指定天然記念物)や津久田の人形舞台並人形(県  
指定重要文化財)等が見られる。

街道は南の原から木の橋樋を渡って、すぐに折れ北東へめぐり出て、坂を  
あがると松の木坂の頂上に立つ。この辺りの道は旧状をとどめている。松の  
木坂は街道中の最大の難所でけわしい急坂であつた。

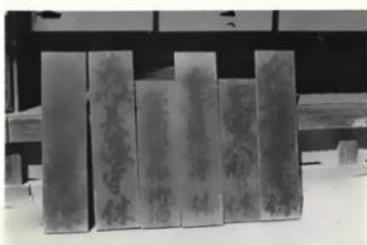
貞享元(一六八四)年  
「松ノ木坂は勢多郡南雲村にあり  
岩石多く沓木道を狹み屈曲極めてびし  
下れば則ち長刀路を払い  
上れば則ち磐石胸を支う  
極めて輸急の處なり」

(前橋風土記より)  
「松ノ木坂は勢多郡南雲村にあり  
岩石多く沓木道を狹み屈曲極めてびし  
下れば則ち長刀路を払い  
上れば則ち磐石胸を支う  
極めて輸急の處なり」

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財



南雲宿久保坂入口



南雲宿本陣の宿札



南雲宿本陣の宿

松の木坂を下ると、小川田の追分で坂の終った左の奥また所に大きな庚申塔が建っている。<sup>(5)</sup> 握毫された藤賀和の雄渾な筆致が胸に応える。追分から岐屋（木島家）の横を通って海老坂に出る。南雲宿を左にながめながら、ゆつくりとくの字に回る坂をくだると南雲宿である。このあたりが南雲沢で最も幅の広い所で、沼尾川の流れがゆるく川幅が広い。渡してある久保橋は長さ九メートル幅一・八メートルの土橋であった。その橋のそばには鍛冶屋、菓子屋、菓子製造屋、酒屋、貨馬業、少しはなれて名医香川先生の屋敷があつた。にぎやかなところであった。しかし、昭和二年の沼尾川大水害で、ひとたまりもなく押流されて跡形もなく川原となってしまった。

久保橋を過ぎて、久保坂にかかると、左側に南雲宿の間屋小松屋、右側には旅籠屋を兼ねて薬品、雑貨を扱っていた久保屋がある。<sup>(6)</sup> 久保坂には多くの供養塔や碑文があるが、その中で、無幻道人の南無阿弥陀仏は深い関心をもつた。

八幡宮は、赤城村長井小川田地内にあり、明治四十三（一九一〇）年村内の無格社を合祭した。角田家の諏訪神社、大畠家の熊野宮を始め大山祇神社（高釜・年丸）、神明宮（上狩野・長井坂）、稻荷宮（藤木）などで、拝殿には歌舞伎舞台を改造したので、すばらしい櫻の角柱が使われている。境内には立派な太々神樂殿と杉の老木が三本偉容を示し昔を語ってくれる。

また、高秀寺は真言宗で同地内にある。

瑞雲山高秀寺と称して奈良県長谷寺派。弘仁二（八一）年僧実慧開基と伝える。創建が古く、南雲沢の北側台地で景勝の地を占めて、小さいが整つた本堂、庫裡、倉庫があり、庭には湧水池の島に天神宮の御堂がある。惜しいかな無住に等しく壇家も少ない。

この寺社の間に、飲食をする一杯屋、兌物雑貨のタナの家、旅人宿、木賃宿などがあつて、まとまりのある宿場をなしていた。夏の日園は近郷の名物となっていた。

		No
55	54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43	
庚申塔	金竹久保掘	大坂
寺屋敷湧水	聖天宮	勝保沢澗玉
勝保沢跡	宗玄寺	勝保沢澗玉
赤城山之鳥居	寛政九年	元和八年開山
諏訪神社	元和八年開山	觀音堂
六本木	出世觀音堂	
北井戸	吉藤加賀守安清居城	
寺屋敷湧水	太々神樂、垂持石	
幕府勘定奉行小糸上野介の赤城埋蔵	松並木	
金	固定式歌舞伎舞台	
藤賢和書		

3 満邑木宿から南雲宿へ



南雲宿（明治～大正初期）



長井坂の道しるべ

不動尊への立派な道しるべが建っている。この地には、戦国の世、武将が鎧を削つた長井坂城跡

南雲宿本陣の東、エーケン坂を上ると藤木に出る。藤木の東端を通つて北西に折れ、大の沢を越えて軽浜坂、この坂を蛇のよう曲りくねつて鉢沢から今宮に向かって北東へ進むと、程なく今宮の十二宮前に出る。ここには石祠と芭蕉句碑万延元（一八六〇）年建立がある。<sup>(6)</sup>

今宮から北西に折れて、なだらかな坂を上りつめると草原に出る。北東へ少し進んでから左へ折れて、芭蕉句碑安永九（一七八〇）年のある雲雀塚へ向かう。この句碑は街道最古のもので、地元の棚下堤、素第<sup>タカハシ</sup>が前橋の俳人素輪の援助で建立した。ここから北へ一キロ余綾戸の北端長井坂に出る。この所には棚下

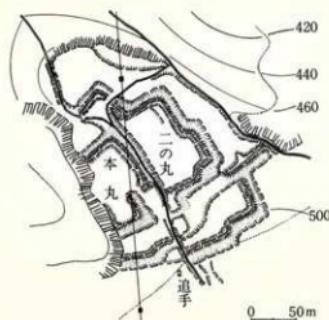
#### 四、南雲宿から森下宿へ

61	60	59	58	57	56
高秀寺	八幡宮	南雲宿本陣	桜森のヒガン桜	津久田人形・舞台	南雲宿間星跡
御嶽の家	御嶽の家	教島のキンメイチク			
角田家	国指定天然記念物	県指定天然記念物樹齋約四〇〇年			
弘仁二年岡山	津久田人形・舞台	県指定重要文化財			

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財



長井坂の登山路



山口家家屋



永井円乗院の宝筐印塔

の諸将が境目城として重視したので、絶えず死闘が繰り返されていた。東西一八九メートル南北二〇七メートルの地域に本丸、二ノ丸、三ノ丸などの構造をとどめていて昔の面影をしのぶことができる。近く開通される関越高速自動車道は水井橋からトンネルによって、城跡の真下を北から南へくぐり抜けたがっている。

勢多、利根の都界で西は利根川に望む断崖、北は水井の深い谷、東が少し開けて原野に続いている要害堅固の地である。戦国動乱の頃は上杉、北条、真田

ここから昭和村にはいる。長井坂城跡をあとにして、断崖に沿った道を七曲り八曲り水井集落における道で俗に水井坂と呼んでいる。現在はほとんど廃道となっていて、獣をするものなどが時たま通るぐらいである。坂を下りると、左側に昔は殿様や諸役人が休憩したという山口家がある。

山口家々屋は昭和村水井集落、永井坂ふもとにあって、普通農家の構造であるが、出居よばれる造りが練（廊下）を三方に廻らし、八疊の部屋の在り方が大部屋をことにしている。永井坂下り口（沼田方面からは上り口）附近の旧街道に面し、江戸時代通行諸役人、時には参勤交代の殿様の休憩所として使われていたといわれている。

この山口家より東へ五〇〇メートル程はいったところに円乗院の宝筐印塔が建っている。<sup>(8)</sup>

昭和村水井、円乗院という天台宗寺院境内にあって、信州高速弥勒村、石工伊藤新助、同友八郎両名の作、文化十一年（一八一四）甲戌年十二月の建立である。高さ四五四センチ、土台石

ンチの彫刻、全体のバランスのとれた堂々たる風格があり、農村には珍らしい塔である。

山口家よりちょっと下がると、永井塚と呼ばれている流れに橋がかかっており、下水井橋と書かれており、沼田市へ八キロと橋柱に示されている。

永井塚を北西に向かって上り、永井箱根神社を右手に見て、永井集落の舗装道路に出るが、その道路をさらに西に向かって約一〇〇メートル行ったところに、右にはいる無舗装の六尺道路があり、この道が旧街道で往時の面影を残している。

この街道三〇〇メートル程西に岩下清水古墳群がある。(四)

昭和村入原清水附近一帯に、奈良時代に造られた直径五メートル、一〇メートルの円墳が多く、昭和十二年の調査では、この附近一帯に二基の古墳が確認されている。昭和四十九年この東方一キロ附近県道改修工事の際発掘された古墳からは円筒埴輪、人骨等が発見された。同古墳はそのまま埋められ、道路下になっている。

細い無舗装の坂の堤割道、杉並木の下の道を下ると入原集落へ出、農家の散在する道を入原集落三差路火の見やぐらのある地点から北々西に行くと、右手に雲昌寺<sup>(70)</sup>、左手に保育園がある。

雲昌寺は山号赤城山、宗旨曹洞宗で本寺沼田市舒林寺、本尊釈迦牟尼佛である。また子育地藏尊<sup>(6)</sup>像丈六寸)となつて立つ。創立は慶長十三(一六〇



岩下清水古墳群の一つ



雲昌寺の大けやき

八年、現在の本堂は五世の本堂で、本堂五代延宝間に建てられたもので、本堂五坪、庫裡四坪、廊廻四坪である。

開山堂五坪、

鐘堂、東司等木造建築として風格ある建物である。また開山堂にはたくさんの仏像が保管されているが、最近その中に中世の木彫仏が発見された。また、境内には県指定天然記念物、雲昌寺の大ケヤキがある。

すぐ下の入沢橋を渡つてさらに北に進む、現県道前橋・片品線がそのまま旧街道であり、森下宿に達する。

森下宿は古くは、森下古墳群により推定されるように、利根沼田地方が開発される本拠地的なところであつた。古墳よりの出土品、五鉢鏡や宮原地内から発見される瓦塔の破片などから、準國分寺の存在が予想されたりしている。

さらには下つて江戸時代初期に天和元年沼田真田伊賀守改易の折には、城受取りの為十二月十九日寅の刻、安藤村馬守義下に陣取り堀川大手口へ御入り。(「江戸志料集解より」)とあるように、片品川東より対岸沼田領沼須への渡舟で交通の要地ともなっていた。あたかも江戸に対する品川宿といったあんばいであつたろう。

元禄一(一六八九)年森下宿制(森下、真下、久家所藏文書によれば、上、中、下の三宿に協定し市日を定め、夏季の夜店なども張り、森下街と記されている。大体通りの家は半商半農で、酒醸造元二軒、味噌醤油醸造二軒、旅人宿三軒、その他米穀商、小料理店、油屋、豆腐屋、呉服屋、雜貨、荒物、

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財



森下宿真下一久家に残る入札紙

染物、小間物、筆墨店、材木商等が並んでいた。特に本陣と称する高級武士達の宿泊所もあり、問屋は上、中、下に三軒あり、下宿の問屋は本陣づき問屋で、その権勢振りは大変なものであったようである。昼夜共常時人足八人を置いて用をたした。

享保十三（一七二八）年申八月の資料によると、角田庄兵衛が主人で、身内一〇人、下男九人、下女五人、馬一〇頭と記されている。

この森下宿の繁盛振りの片鱗をかつこうとしたためか、隣村の川頬村との間で訴訟が起きている。その書き出しの一部を紹介すると、

取替証文之事

沼田領内御料私領村々より、前橋町伊勢崎町市場へ柿煙草等の荷物草俵にて附出し商先仕候處、前橋通り森下村の者去丑十一月番人を附置き、隣郷川

（以下略）

というような一件が長文でしたためられており。その他にも上宿中宿における問屋交代の入札（選舉）に関するごたごたを示した資料や、

沼田城下の新聞屋に関する出入り（訴訟）、安政五（一八五八）年の諸入用帳など、多くの資料がある。

現下宿下家は江戸末期の建物であり、三郎兵衛さまと呼ばれて名主を勤めた家といわれ、江戸中期以降の入札（選舉）用紙が三〇枚も発見されており、これは村の名主、組頭、百姓代など村役の

- 1 沢浦家(万屋)母屋
- 2 角田家(問屋)母屋
- 3 本陣跡(現在農協)
- 4 真下家(問屋)母屋
- 5 真下家母屋
- 6 青木家母屋
- 7 真下家土蔵
- 8 高札跡
- 9 真下家母屋
- 10 中島家(空屋)
- 11 中島家(空屋)
- 12 織貫家母屋
- 13 沢浦家問屋跡
- 14 織貫家母屋
- 15 真下家母屋
- 16 真下家母屋
- 17 金井家母屋
- 18 角田家母屋
- 19 金井家母屋
- 20 沢浦家母屋
- 21 沢浦家母屋
- 22 渡辺家母屋
- 23 沢浦家母屋



投票用紙で、縦横八センチほどの生紙である。「勘定人平吉様御願申上候」となどと記入されている。

勘定人入札の事 森下村  
第壹番札 百四拾四枚 甚左衛門  
第貳番札 参拾壹枚 九兵衛  
右之通り名主組頭長百姓立合の上開札仕り候處少しも相違無之御座候  
安政六年十二月七日

とあり、二人が勘定人（会計係）に当選したことがわかる。

これらの沢山な資料から江戸時代における森下宿の重要性が察せられる。

宿内の通りは真ん中に幅三尺ほど  
の溝を掘り水を流し、株久保村への通路との三差路附近に高札場があつた。道幅は片開九尺であった。宿をはずれると道は急にせばまり九尺幅の通路になつた。



遍照寺門前 光庭書の庚申塔

森下上宿はすれに大森神社と遍照寺が左手にならんでいる。  
遍照寺は山号景德山といい宗旨は天台宗である。本寺新田郡世良田の長榮寺、本尊阿弥陀如来、創建は貞觀のころといわれ、現本堂は正徳年間の建立である。

門前に光庭（無幻）書の立派な庚申塔がある。また境内には霧座の地蔵尊（銅製）があり、台座の銘に「千

時享保四己亥年十

## 五、森下宿から沼田へ



森下城跡

もう一基の句碑には  
表 物いへば君寒秋の風  
ばせお 沢乙満持書  
建立年月は刻まれていないが、  
多分前述の句碑と同時期につくら  
れたものであろう。  
沢乙満という人は後に無満とも  
号した方である。  
橋を渡つて右へ曲りすぐまた左  
へ曲がる小道が旧街道である。  
県道がそのまま旧街道で、付近

名 称	年 号	備 考	No
藤 塚	万延 元年		73
今宮の芭蕉句碑	昭和村指定史跡		72
ひばり塚芭蕉句碑	昭和村水井		71
長井坂城跡	文化二年		70
円乗院宝篋印塔	文化三年		69
馬頭観世音	大名等の休憩した家		68
山口家屋	二〇余基の古墳		67
岩下清水古墳群	県指定天然記念物		66
岩昌寺大ヶヤキ			65
森下宿問星跡			64
森下宿本陣跡			63
五鉢鏡出土古墳			62

月吉日、上州勢多郡伴仕庄森下町と刻まれており、この附近は往時伴仕の庄といわれた名残をとどめている。橋の手前森下兼沢沢浦氏庭内に芭蕉句碑が二基ある、その一つは石の側面に「文化九年申歲臘月 補助惣連中」とあり建立の年月である。

寺社わきの県道はやや急こう配な坂で北に向かうと小川が流れしており、橋表はやこなへといふ露のおほかの下はかれなくとも袖をかたしきて、にんにんと乗りあればや堂の人旅人と我名呼んはつ時雨

裏 物いはぬもなきものを秋のくれ  
この久保山人といふ人は、保穢（浦天喜）とも称し、昭和村樺久保集落に生れ、諸国行脚の末晩玉川に住み、文政六（一八二三）癸未年五月一五日歿した。「はづしぐれ」文化一一（一八一四）年「絶空言」文政元（一八一八）年をそれぞれ江戸で出版し、二冊の吟詠集を残している。

ばせ 於  
久保山人

もう一基の句碑には  
表 物いへば君寒秋の風  
ばせお 沢乙満持書  
建立年月は刻まれていないが、

多分前述の句碑と同時期につくられたものであろう。

沢乙満という人は後に無満とも

号した方である。

橋を渡つて右へ曲りすぐまた左

へ曲がる小道が旧街道である。



片品川渡し場の念佛塔



三ツ谷双体造祖神

は鎌沢田んばと呼ばれている。左手に往時の森下城跡があり、田んば中を通る県道がやや東に曲がり三ツ谷三差路と呼ばれる地点に出るが、その手前に腹切り石がある。<sup>(76)</sup>

この腹切り石は昭和村権保塔之前、田んばの中に所在する、森下城主加藤丹波守という戦国の武将が天正十（一五八二）年十月二十二日、北条氏邦の軍勢に攻められ、落城もせまり、城を出て最後の一戦のあと、この石に腰かけ切腹したと伝えられている。この石にさわっても腹が痛くなるといわれ、現在でも村民にそう信じられている。

この石の一〇〇メートル程北に三ツ谷双体造祖神が建っている。<sup>(77)</sup> 烟土手上にあつて、古い道祖神と伝えられて

いるが、建年月については、寛と云う字のみは読みとれるが、次の文字はどうしてもはつきりしない。

それより県道は坂を下るが、旧道は左におれる小道にはいり、片品川に沿つて北上する

こと一五〇メートル、さらに左におれて五〇メートル、片品川より沼田市

沼須町に渡る旧渡し場の地点に達する。ここに徳本の石の念佛塔が建てられている。<sup>(78)</sup>

この片品川渡し場の念佛塔は昭和村三ツ谷川原に、往時の渡し場であった目印のよう建てられ、江戸中期徳本流念佛で知られている。

古老の言によると、昔片品川に大水が出てその時死人がで、この川原にたくさん死体があり、その供養のために旅僧がこの塔を建てて、いずこへか立ち去つていったと伝えられている。文政五（一八二二）壬午年と建立年が刻まれている。徳本は紀州の人で、文政元年に六一才江戸で歿しているので、旅僧が徳本自身ではなく、その流れをくむ人であつたといえよう。しかし徳本独特な書体で、南無阿弥陀佛 徳本<sup>①</sup>とあるので、貴重な塔碑である。



沼須町の旧街道

片品川のその附近一帯は、現在積石土手の堤防になつておらず、川を渡り沼須町にはいると道は点在する農家を両側に見て、一直線に北々西にややゆるいこう配で上り、砥石神社につきあつた。

砥石神社は沼田市沼須町にある。祭神は日本武尊、祭典は毎年四月三日。古く戦国時代に北条氏の沼田城攻めにも、その社名が出てくる。沼須の一切経で近隣に著名である。

紙石神社裏境内に沼須の七重塔がある。

○センチ、塔は堂々とした風格を

そなえ実に立派なものである。七重各階とも正面石格子戸各階層一字ずつの文字彫りあり。



高橋家の長屋門



沼須の七重塔



正覚寺の宝鏡印塔

右 南無過去多宝仏  
左 南無無軒牟尼仏

裏 南無妙法蓮華經

土台石文字

維時明和四年歲次丁亥九月吉祥日 造立宝塔 当村地主小林  
多左衛門本房 七十八才 為智德院繁翁義昌居士 細工人用

助、母慈次

また同町には沼須人形芝居の人形頭及び付属品一式が残されている。

昭和五十一年三月三十日、市指定重要文化財となる。人形頭三〇、衣装小道具はか一式、この沼須の人形は、幕末のころ、沼須の金井仁左衛門が、阿波國の旅芸人より買い求めた。村人で一座を組み附近の村々を回る。その後中断されていたが、最近になって復活した。人形の頭は小さく、一人あやつりで阿波人形とされ、目・口の部分が動き指手胴輪に工夫がこらされている。

沼田市栄町の道端に面して高橋家の長屋門が残されている。<sup>(8)</sup> 小形ではあるが江戸時代からの長屋門である。高橋家は昔、甚左衛門といい代々名主を勤め名字帯刀を許された家柄であったという。

さらに直進すると、坊新田町に至る。左方三〇〇メートル程奥の鍛冶町に正覚寺がある<sup>(8)</sup>。宗派は浄土宗で本寺太田市大光院、本尊阿弥陀如来である。他に百体觀音、春童上人像、創建応永十三年（一四〇六）年である。本堂六角堂、觀音堂、御靈屋、山門があり、境内地一四〇〇坪である。

境内には真伊豆守信幸の妻大運院の墓宝鏡印塔元和六年（一六二〇）年がある。また大きな高野櫓があり、市指定天然記念物となっている。

沼田市坊新田町には妙光寺がある。山号慶寿山、宗派日蓮宗で本尊日蓮聖

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財

No	名 称	年 号	備 考
84 83	82 81	80 79 78 77 76 75 74	芭翁句碑 一基 森下城跡 腹切り石 双体道祖神 念佛塔 阿曾城跡 砥石神社七重塔 庄屋屋敷長屋門 正覚寺高野マキ 妙光寺宝鏡印塔 県指定神社大ヶやき
寛文 九年	文政 五年	天和元 四年	明和 四年
昭和村森下	徳本流書体		
高橋家 市指定天然記念物 市指定重要文化財			

人、寛定十界大坐荼羅、本堂、鬼子母神堂、清正公堂、稻荷堂等建坪の一五〇坪である。創建は弘安年中といわれる。

妙光寺境内に慶寿院殿の墓及び宝鏡印塔がある。

昭和五十一年三月三十日、市指定重要文化財となる。

絶支三二「センチ、「慶寿院殿久日榮大師尊位」また台側面に「寛文第九、居維作應歲。仲夏(下院七冥)」の刻銘がある。居維は「ち」と、作應は「とり」、仲夏は五月、下院七冥は二十七日没である。慶寿院名は小野お通、真田信吉の御室で、伊賀守の母である。寛文七(一六六七)年本隆寺を改築して妙光寺と改め、自らも開基者となり、寛文九年五月二十七日没した。

街道は坊新田町も直線に本町通りとお馬出し通りの四ツ角に到達する。このお馬出し通りと本町通り四ツ角に往時は高札場があり、お馬出し通り入口左側が沼田検断のあった位置である。ここで沼田街道は終点となる。砥石神社よりここまで距離は一・五キロである。

#### 森下宿から沼田へ

沼田へ向かうとお馬出し通りの四ツ角に到達する。

このお馬出し通りと本町通り四ツ角に往時は高札場があり、お馬出し通り入

会津街道の起点沼田市は城下町であった。天文元(一五三二)年沼田万鬼齊顯泰が沼田城を築いて以来、真田氏、本多氏、黒田氏、土岐氏と引き続い居城としてきた。顯泰は城の南側に本町、鐵治町、材木町とまず三か町を割り立てた。城へは白沢用水を開削して水を引いた。

白沢村より次のような古文書が出ている。

就用高平山へ他處より新取人馬不可出入者也仍如件  
元和三年一月廿日

桑原一左衛門尉 朱印

高平百姓中  
奉之

その後真田伊賀守まで一〇〇年の間に、現在も残る町名坊新田町、馬喰町、栄町、原新町、高橋町などが割り立てられた模様である。天和元(一六八一)年真田伊賀守改易となり、城は幕府により破却された。古くは、現在の大手お馬出し通りの本町角には、城に向かって左角の位置に検断をおき、その辺は高札場になっていた。検断とは、室町時代に刑事犯人を検挙・断罪する場所であった。江戸時代には辻番所とも呼ぶようになった。

本町、鐵治町、坊新田、材木町、原町通り等の道路の中央には水路を造つて水を通していた。町の割り立ては城下町整備の目式になつており、各宗派の寺院がならび、各町のはすれには、鐵治町木戸、坊新田木戸、馬喰町木戸、材木町木戸、栄町木戸、原新町木戸(原町御門)高橋町木戸と、七戸木戸あつて通行の監視所としていた。

永録五(一五六二)年頃より毎月四、八の日を市日と定め、近郷近在の物資や民衆が集まり繁盛した。

利根地方から送り出される物資は、木材、柿、たばこ、うど、わらび、炭、

### 六、沼田から原田集落へ

大小豆、紙、醤油などで、前橋方面から送られてくるものは、反物、石、なんが、小間物、あらもの、砂糖、疊表、うどんなどであった。これらのものを扱う専門商家がふえていった。街道は沼田市の本町と、坊新田町お馬出し通り四つ角が起点となつて始まる。

この起点の北側に沼田城跡（本丸跡）がある。<sup>(85)</sup>

昭和五十一年三月三十日、市の指定史跡として、三・八四ヘクタール公園地内が指定となつた。

沼田城は沼田氏十二代万鬼斎頼泰によつて築かれ當時、倉内城とよばれてきた。天正八（一五八〇）年真田昌幸が入城し、城の規模をひろげた。その後北条氏が一時城主となつたりしたが、天正十八（二五九〇）年真田信幸が沼田領一万七千石の城主となつた。慶長十二（二六〇七）年五層の天守閣を建



沼田城跡



旧生方家住宅



沼田城

真田氏が改易になつてからは平等寺の鐘となつていて、明治三十一、年ごろ沼田町の時鐘となつた。領内

領主の安穏と領主の長久を祈る銘や、

造したが、真田氏五代の城主伊賀守が徳川幕府に領地を没収され、改易となつた翌年一月沼田城は破却された。その後本田氏が幕府の許しを得て三の丸に屋形を建て、次いで黒田氏土岐氏の居館となつた。明治になつては屋形も取りこわされ、三の丸の城地は学校民家が建ち、二の丸、本丸跡が現在の公園になつてている。

沼田公園内には旧生方家住宅が建つてゐる。昭和四十五年六月十七日、国指定の重要文化財として保存されることになつた。桁行二三・五メートル梁間一二・一メートル沼田市の上の町街角にあつたものを公園に移築した。旧沼田藩の薬種御用達を勤めたといわれる。永禄天正の頃から武士から薬種商にかわつたと伝えられる。妻入板葺きの町家で十七世紀末頃の建築物で、元治元（一八六四）年に大修理を行つて、その後もいく度か増改築されたらしい。「かどふじ」という屋号でよばれていた。<sup>(86)</sup>

また、沼田市市役所内に城鍾が保存されている。

昭和二十九年三月三十一日、県指定の重要文化財となる。身高八二・四センチ、笠高六センチ、撞座高一六・五センチ、胸爪高四センチ、厚さ六センチ、口徑六七・六センチ江戸初期の代表的作品である。寛永十一（一六三四）年沼田城主真田氏一代信吉が沼田で鋤造させた。沼田城三の丸の櫓にあつて時報をつげていた。

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財



中央病院わきの道標



沼田市材木町通り四つ角

沼田市材木町通りに至り、現在は伊勢屋デパートがある四ツ角になつてゐるが、昔は突き当りに警察所があつて、旧街道は材木町通りを左に曲る。約一五〇メートルで倉内通りとの四つ角になるが、

旧道はこれを右に折れる。ここから九〇〇メートル程北には三光院の十一面觀音像がある。

昭和二十九年三月三十日、県指定重要文化財となつた。像高は一八七センチ、頭長五二センチ、檜材の寄木造り、新築した収蔵庫へ安置されている。修理解体の折り首部の内ぐり部分に次のような墨書銘があつた。

「奉始十一面觀音新立日 文水  
七年大才 庚午九月十六日 大



弁財天道標 (元文6年)

寺の鐘となつた由来などが刻まれてゐる。旧道は本町通りを北東に進み材木町通りに至り、現在は伊勢屋デパートがある四ツ角になつてゐるが、昔は突き当りに警察所があつて、旧街道は材木町通りを左に曲る。約一五〇メートルで倉内通りとの四つ角になるが、

旧道はこれを右に折れる。ここから九〇〇メートル程北には三光院の十一面觀音像がある。

昭和二十九年三月三十日、県指定重要文化財となつた。像高は一八七センチ、頭長五二センチ、檜材の寄木造り、新築した収蔵庫へ安置されている。修理解体の折り首部の内ぐり部分に次のような墨書銘があつた。

沼田市材木町通りに至り、現在は伊勢屋デパートがある四ツ角になつてゐるが、昔は突き当りに警察所があつた。これに応じて沼田氏小沢城主景朝が國分に攻め入り、村上氏を攻め滅ぼし、この十一面觀音像を持ち帰つた。

後に真田伊賀守が觀音堂を建て、いまに伝えられたといわれてゐる。

六キロ現在利根中央病院のある四つ辻の中央病院側角に、明治十四年に建てられた。右日光阿いづ道 左可志よう山道とするされた道標がある。江戸時代には原新町木戸または原町御門ともよばれていた場所（現在天理教支部のある地点）を通ぎて東進すること三〇メートルほどで前述の道標のある道の分歧点に達する。これより横塚町入口土橋へと道はやや北東に曲がる。旧街道は現横塚町を直進する。

沼田の郊外を旧道は国道二二〇号線と重なり東へ向かう。沼田市街より一キロ程進むと片品川の崖上に出る。ここを土橋といい、三差路となつており、国道は右手に直進し、旧道は左手に入る。五〇〇メートル程進むと、右沿いに延命寺が見える。

延命寺は沼田市横塚町にあり、宗派は天台宗である。本尊阿弥陀如来で、境内に千体仏（木彫）が保存されている。

また庚申塔など石造物がたくさん残されている。

街道はさらに東へ進むと白沢村原田にはいる。右沿い畑中に、弁財天道標・元文六（一七四一）年が建つてゐる。

ここより、二二三〇メートル行くと、道が二手に分かれる。旧街道もこの二道

弘師法輪快覺大歡進僧慶賢  
右志者為一結諸衆等現世安穩後生善處乃至法界  
衆生平等利益也」

伝承によれば、応永十三（一四〇六）年群馬郡国分の村上出羽守利根の地に攻め入り、川田城名胡桃城を攻めとつた。これに応じて沼田氏小沢城主景朝が國分に攻め入り、村上氏を攻め滅ぼし、この十一面觀音像を持ち帰つた。

が使用されていた。

沼田より会津へ向かうには、いずれにろ、ここより標高一二五八メートルの武尊山より南東に伸びた山脈とも言ふべき、枝縄<sup>ハラモチ</sup>を越えなければならなかつた。この会津への越えの道を東入りといふ主要と間道を入れて七本  
あつた。

No	名 称	沼田城跡	天文 元年	市指定史跡	備 考
93 92 91 90	89 88 87 86	旧生方家住宅 天王石 東神寺 城 桂 寺	寛永 二年	旧生方家住宅 天王石 東神寺 城 桂 寺	市指定重要文化財 市指定重要文化財 市指定重要文化財 市指定重要文化財 市指定重要文化財
弁財天道標	三光院十一面觀音像	明暦三年創建	明暦三年創建	牛頭天王社殿跡 運慶作(とげい) 真田河内守信吉墓	市指定重要文化財 市指定重要文化財
延命寺 道 標	文水 七年	元文 六年	元文 六年	千住佐(木像) 白沢村原田地内	市指定重要文化財 原新町地内 石造物

七、原田集落から花咲・幡谷集落へ

二手に分かれた道を左手に進むと川場村となり、立岩屋原の集落を通り、  
薄根川を渡ると、橋のたもと、右手に江口きち歌碑が建っている。  
(94)

青龍山吉祥寺と称し、臨濟宗建長寺派の寺院である。開山は中巖円門禅師、開基は大友刑部氏時と言う。大友貞宗が九州博多の領主であった頃、大友貞宗と中巖円門禅師と知り合い、文覚のあつた禅師は、大友の出生地である



灰岩質の岩に觀音の立像を彫り込んだもので、その数全部で二〇体程ある。觀音はみな円光を背にして麗の村を見下している。



川揚村 古 標 先

年大本山延長寺住僧方滿惠計有苗  
の中興開山によって再建された。  
本尊は釈迦如来（三尊像）、脇  
空藏菩薩木像、山門楼上にある。  
十六羅漢木像などは名作と思われ  
る。境内のシメ小松は、県指定天

卷之三

この吉祥寺より三〇〇メートル

北東の川場村谷地に岩観音がある

二〇二一、三、母

音二〇ハリト川

所岩質の岩に被覆  
觀  
の立像を彫り入る

岩の立像を題に述べ

全部で二〇体程あ

場刊

川

村を見下している

ている。

落を通る集落のはずれに川場温泉が

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財

呼んでいた。

木戸の手前的小住より、赤倉の渓谷沿いの林道を上る。風光明美の道で、



川場村 武尊神社

この湯原の武尊神社は明治十七年頃合祭したもので、神仏混交の神社と思われ、里人中にはいまだ薬師様と呼ばれている。彫刻も巧みであり、天井の絵画は法眼狩野探雲晩年の作といわれ、運筆の妙録渾脱である。

建立は享保十四（一七二九）年と言われている。

旧道は北東に少しづつ向きを変え、薄根川に沿い山合いには

いくつ山合いに小住温泉がある。

この先より、道は再び二手に分かれ北へ進む道と、東へ進む道とに分かれている。北へ進む道は木戸に至り、さらに北上し、くねりながら、東へと向かう。花咲（背瀬）峠を越えて花咲の針山に出る。この道は神越えの中で最も北を通る道で、案外楽な道で里人や旅人もこの道を選んで越えたようである。会津戦争の折も沼田藩士をはじめた支隊はこの峠を越えて進んだといふ。

<sup>(98)</sup>

木戸に如意輪觀音堂が建っているが、その裏から東へ上る道があつたが、いまは廃道となっている。昔、頂上付近に立派な松が生えていて、落武者主従が

一休みと腰を下して松をながめ、その美しさに、これは鉄に見積れば千貫文の価値があるとほめたのが、千貫峰の名が付いたいわれと伝えられている。

この千貫峰を越えて、花咲に通じていた道があつた。これを千貫峰越えと呼んでいた。



白沢村塙ノ井の双体道祖神道標

昔は五本橋道などとも言っていた。標高一二三〇メートルの峠を越えて、幡谷集落へ下る道で、今では花咲より、自動車道ができる川場花咲は自動車にて越えられるが、あまり良い道路とはいえない。街道を元に戻り、弁財天道標を過ぎ、最初の二手に分かれる道を南の道へ進むと、白沢村塙ノ井に至るが、いまはほとんど廃道になつていて。塙ノ井の集落の手前の道の左側に如意輪觀音道標（享保二（一七四二）年）が建つている。

これより、五〇メートルほど先には葦葦大権現安政六（一八五九）年が見られ、さらには一〇〇メートルほど行くと、丁字路に突き当り、そこに反体道祖神が建てられている。<sup>(99)</sup>

この道祖神は享保十四（一七二九）年の建立になるもので、道標ともなつておらず、東会津・西月夜野と記されている。ここから一〇〇

メートル東へ行くと、喜水四一八五年建立の馬頭觀音世音がある。

そのわきを上り、土橋を渡り、雨乞山の南麓沿い田代峠を越えて赤倉

峠越えの道と時にて会して、幡谷の辻道標の馬頭觀音の地点に出る。

これを田代峠越えと呼んでいる。

この道は幡谷集落へ下る道で、もっとも越えやすいところで昔より土地では会津道と云つてゐる。

No.	名 称	年 号	備 考
104	江口きら歌碑		
103	天神古墳群		
102	吉祥寺		
101	岩観音		
100	武尊神社		
99	如意輪觀音堂		
98	如意輪觀音		
97	道 標	江戸中期	川場村
96	如意輪觀音道標		
95	十二 様		
94	道 標		
	二〇体磨崖現	寛保 二年	境内シメ小松
	双体道標	安政 六年	県指定天然記念物
	如意輪觀音道標	享保 一四年	二〇体磨崖現
	花咲地内		神仏混交
	塙ノ井地内		巫師様と呼ばれる
			木触地内
			花咲越えと千貫越えの合流点
			塙ノ井地内
			花咲越えと千貫越えの合流点

## 八、原田集落・高平宿から大原新町へ

原田集落より、田代峠越えの南の道を進むと高平宿に達するが、その手前には、馬頭觀音森水（一八五一年建立。延享五（一七四八）年建立の道標が見られる。そこを過ぎ、国道一二〇号線と再び合流したところが高平宿である。

高平宿は標高五六七・四メートル慶安一（一六四九）年沼田城主内記信政によつて、高平の宿割が行われた。その折り、屋敷一軒につき銭五〇〇文ずつお祝に差上げた。この祝金を納めた人達は名字が名乗れた。外の者は名乗れなかつた。六六軒程の所一二〇軒程の者が祝金を納めなかつた。宿割の周辺に神社が二社、宿中に寺院二院、番所二か所、高札場一か所、屋敷は大小あつたが、平均して一反七畝程が多かつた。高平は、横堀と大原の中間にあり物資の仲経き所として問屋も設けられ、半ば商業的農村として、發展を約束されたが、それだけ一方では、沼田藩の經濟上の施策にも從わなければならな



白沢村塙ノ井の馬頭觀音

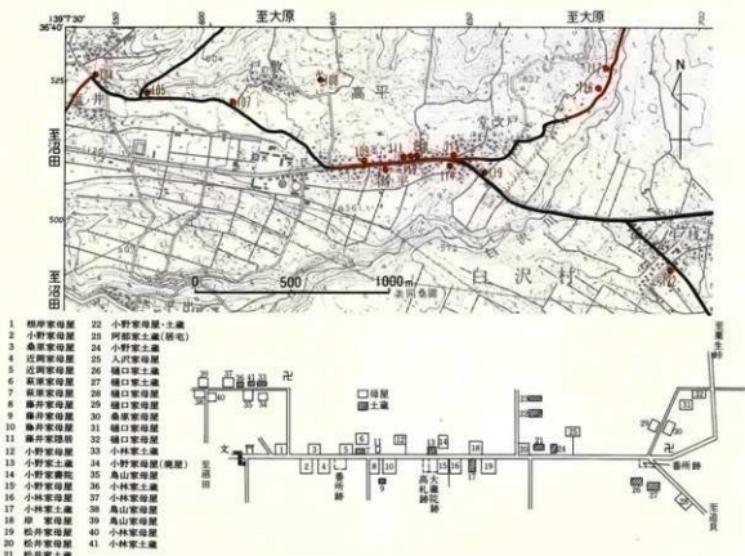


沼田用水（沼田市土橋付近）

この高平宿は長禄二（一四五八）年上野介景康が沼田の要害に倉内城を築城した折、その城塁の水を白沢村高平の白沢川の水と源澤の谷水を合わせ、沼田用水として、城下町の庶民の飲用水として用い、その水源とした。

これより城の内外沼田町の給水に完べきを期した。その後、水道ができるまで、沼田用水は下流の渋瀬に町民の貴重な用水だった。幕政時代、高平は水源確保のため、入山権など充分に与えられ、使役も他村より少なかつた。しかし、水番として火災の時、増水、干天の時など、責任ある使役を尽して今日に及んだ。延長三里有余に渡る成堀川、水に

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財



ついても時代の推移盛衰の歴史を知らされる。宿のほか中央国道に面して書院の五葉松があり、県指定天然記念物となっている。小野家敷内にあり、品種は四国产樹高約二二メートルで目通り

二二五センチ。  
推定樹齢三四〇年である。

慶安二(一六四九)年高平宿割のとき、沼田城主内記

信政の事務作業の館の庭木として植樹される。その後享保年間黒田直純沼田城主となり。領内見回りの休憩の場として、書院風に建てられ、書院の松と呼ぶに至つた。

宿の北四〇〇メートル程のところに武尊山雲谷寺がある。

曹洞宗、沼田市新林寺末。開創は元徳二(一三三〇)年である。

開山は天印保宥大和尚。本尊は地藏菩薩。境内は一、一二九坪の広さである。

この高平雲谷寺裏の高台老杉の下に五輪の塔がある。向かって右

より、長州禪門水神とあり、応安三（一三七〇）年庚戌十月廿九日逆修倉敬白と刻まれている。

中央無名の塔を新田義宗公と伝う。左の塔は聖慶神尼ゆい、文和三（一三五四）申年十月十三日中剣死去とある。

その他宿沿いには、薬師寺あるいは嘉永五（一八五二）年建立の水神宮<sup>〔1〕</sup>文政六（一八二三）年石尊宮が見られる<sup>〔2〕</sup>。また、宿の東には番所跡もあり、道の北端には庚申塔貞享五（一六八八）年がたなずんでいる<sup>〔3〕</sup>。ここから道は

また、二手に分かれ、北の道を進むと、栗生峠越えである。宿よりオロケイドと言ふよう、昔、集落のあつた所を、白沢川沿いに上る道で、途中、馬頭大士天保七（一八三六）年建立があり、それより約一〇メートル程に十二山神がある<sup>〔4〕</sup>。その十二山神は、昔沼田城の用水の番小屋があり、そこを堰場といった。そこに石宮があり、その上に木造の宮を作り、附近の人々は今でも参詣している。



石祠内の御神体



栗生隧道



生枝（左数坂越え、右椎坂越え）

この峠は白沢村の生枝より、利根村の園原集落の兩堤へ至る道で、標高一四二三メートル生枝の觀音寺の台門前から峠路となり、坂道を上った。数坂は語呂からして、カツサカと云つて、出征兵士を送

その宮の中には二体の石造の神様が安置されている。寛政七（一七九五）年六月十二日と判読される。この山道を上ると栗生峠に至るが、その峠には、栗生隧道がある。この栗生隧道は標高八四四・六メートル以前は更に上の峰を上下して物資の運搬をしたところである。大原の昌龍寺前に出了道路で、昔、栗生佐右衛門と言う新田義貞の部将が居住していたので、栗生の名がついたと伝えられている。明治の末より、大正年間昭和に至り、最も往復が多くなった。最近まで、隧道の入口までが国道であり、東武自動車の定期バスが往復していたが、昭和三十九年椎坂峠の開通と共に廃道となり、村道に編入された。

隧道の入口近くに、牧水の碑が建てられている<sup>〔5〕</sup>。

若山牧水が老神温泉に宿泊した。大正十一年十月二十六日同道した生方吉次の番傘に書いて与えた歌「相別れわれは東に君は西にわかれてのちも飲まむとぞおもう」この歌の意旨にふさわしいと言ふので栗生隧道の入口近くに建立した。

高平宿のはずれの二手に分かれ道を右へ進むと、一キロ足らずで再び二手に分かれ、直進する

と生枝集落を過ぎ数坂峠越えとなる。

この峠は白沢村の生枝より、利根村の園原集落の兩堤へ至る道で、標高一四二三メートル生枝の觀音寺の台門前から峠路となり、坂道を上った。数坂は語呂からして、カツサカと云つて、出征兵士を送

### III 沼田街道・会津街道の現状と文化財



利根村園原地域の旧道（椎坂越え道）



大原新町家並

る時は、皆この坂を越えてきたもので、慶応四年の会津戦争の時も、この峠を上下したもので、昔からカツサカと言つて旅人の往来もかなり多かつた。栗生と共に里人の記憶に残ることと思われる。

数坂峠手前二五〇メートル程に、首無観音享保五（一七二〇）年建立が見られる。<sup>(四)</sup>

峰には明治となつて数坂を改修した時の隧道があるが崩れています。

ここから下つていったん国道に出再び小さな峠を越えると小遊峠である。

ここには小遊稻荷があり洞窟内には御音像が安置されている。小遊峠を越えると雨堤に出て栗生沢を渡り南へ下つて原田で園原からの道と合する。

原田の分岐点には文化四（一八〇七）年六月の双体道祖神があり、<sup>(五)</sup>会津道はこれから大原下宿へ入つてゐる。

生枝集落に戻り、ここから南東へ進むと椎坂峠越えとなる。

集落のはずれの道沿いに正徳二（一七二二）年の道標が建つてゐる。そこより、さらに南東へ進み、東へ向かう地点より山道にはいり峠に進む。

この椎坂峠は、以前白沢村の生枝より、岩室の十二神裏を通り、利根村の園原の神社の辺りに出た通りで、延暦十（七九一）年坂上田村麻呂が、東征の折り、平川の古滝庵不動尊に戰勝祈願をされた時、沼田平をながめ余りにも絶景なので、記念に持参せる椎の木を植させてより、椎坂の名を呼ぶようになつたとか伝えられている。近世に入ってからは今椎坂峠よりわずか下る。現在峠よりやや生枝よりの地点に、小野忠孝の望郷の碑がある。最近の椎坂峠は国道二二〇号線で直接大原へ出られる。標高七九〇・九メートルのみはらしの良いところで、旅行く人々の眼を楽しませる峠路である。

以上、白沢村高平から栗生峠越え、生枝から数坂峠、ある、は椎坂峠を越える道は、大原へぬける道であるがいずれも険隘急坂であり、街道の難所とされていたのである。

大原新町は慶長五（一六〇〇）年二月、沼田城主真田信幸が宿割りを行ない、それまでは「くねがき原」と呼ばれていた栗生、切島、日ヶ久保、山口等、現在の村より奥地に散居していた人々が相寄つて大原新町となつた。このことに関しては大原区長保管の真田信幸の朱印状がある。

一、大原新町徒他所罷り出者諸役令合赦免事

一、新町きりおりの年貢三ヶ年雇う志や（容赦）いたす事付板橋大原迄取付

慶長五年二月十二日 朱印

会津道は大原へ入ると老神入口交差点で国道二二〇号線と合している。国道は直進して西小学校前から宮沢橋へと下つてゐるが、会津道は左折し下宿から上宿に至つて旧栗生道と合し（標高七〇・四メートル地点）大原神社裏から西小学校裏へ進む。この道路は旧栗生道と同じである。

1	小林家土蔵	18	小林家母屋
2	小林家母屋・土蔵 2棟	19	小林家母屋
3	田辺家母屋・土蔵	20	小林家母屋・土蔵
4	尾池家母屋・土蔵	21	小林家母屋
5	小林家母屋	22	新井家母屋・土蔵 2棟
6	小林家母屋	23	新井家母屋・土蔵 2棟
7	小林家土蔵	24	小林家母屋・土蔵 2棟
8	青木家土蔵	25	新井家母屋・土蔵 2棟
9	青木家(岸屋)土蔵	26	青木家母屋・土蔵 2棟
10	小林家(松山)土蔵 2棟	27	青木家母屋・土蔵 2棟
11	小林家母屋・土蔵	28	小林家(かし家)母屋
12	小林家土蔵	29	青木家母屋・土蔵
13	田辺家母屋・土蔵	30	星野家母屋
14	青木家母屋	31	青木家土蔵
15	田辺家母屋・土蔵	32	金子家土蔵
16	田辺家母屋	33	小林家母屋・土蔵
17	鶴洲家母屋		



大原昌彦寺

会津道が大原へ入る原田の園原道との分岐点に双体道祖神<sup>ミツコロコ</sup>がたたずむ。<sup>(1)</sup> 文化四(一八〇七)年の建立である。

国道を越えた大原西宿内には、小林氏の祖と伝えられる栗生顯友のゆかりの栗生八幡があり、村指定重要文化財となっている。<sup>(15)</sup>

大原新町の西はずれ栗生峠越え道の端に曹洞宗大成山昌竜寺がある。(13)

などが、永禄五（一五六二）年現寺名となつたという。明暦三（一六五七）年五月及び宝曆十一（一七六一）年三月と火災にあつたが立派な山門もあり大般若経その他の什宝が保管されている。

また、旧道は下宿から大原神社前を通る道もあつたが会津道として明らかでない。

会津街道は、上州と会津との物資交流のための重要な道路であり、追分け

幅谷もめんも 手につかず  
しごと指測 そこそこと  
きみに会うなら御座入の

や馬子歌など、数多く歌われていた。その内、金津道に關係深いものとして「東入り村名読み歌」がある。それをあけてみると、

四方山なる穴の原  
高きところを下平

ちよつといつびつ柿平

高戸谷かくと思いしが  
眞實さしのぶのふう

古仲にこの子が宿るとも  
さすりうさま、二十二才

し」と指測 そ、そ、そ、

古傳にこの子が宿るとも  
戸倉のおびは とけにけり  
尾瀬に行こうか帰ろうか  
いちをこいて花咲きて

### 四 沼田街道・金津街道の現状と文化財

No	名 称	嘉永 四年	慶安 二年	延享 五年	元治 二年創建	義宗五輪塔	備 考
126 125 124	十二山神道標	雲谷寺	十二山神	十二山神	十二山神	十二山神	
123 122 121 120	石尊宮	水神宮	水神宮	水神宮	水神宮	水神宮	
119 118 117	薬師寺	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	
116 115 114	書院の松	番所跡	馬頭大土	馬頭大土	馬頭大土	馬頭大土	
113 112 111	牧水歌碑	十二山神	十二山神	十二山神	十二山神	十二山神	
110 109 108	首無觀音	天保 五年	貞享 五年	嘉永 五年	嘉永 五年	嘉永 五年	
107 106 105	望霧の碑	文化 一年	文化 一年	文政 六年	文政 六年	文政 六年	
栗生八幡 昌竜寺 双体道祖神	道標	正徳 二年	享保 五年	寛政 七年	寛政 七年	寛政 七年	
文化 四年	大水五年開基	白沢村生枝地内	高平美相院古門	用水の番小屋あり	五葉松	県指定天然記念物	
村指定重要文化財	児童文学館 「おのちゅうこう」の碑 本尊軒迦如来 原田地内	児童文学館 「おのちゅうこう」の碑 白沢村出身		高平宿			

世にも名高き千貫の松  
ところ針山ふそんせん  
かんのんざまとあらためて  
等が、うたい伝えられている

九、大原新町から越本集落へ



近くまで垂れてて謂に見事である。金津道は下貝戸から約五〇〇メートル、高戸谷産土神社前で左折し、高戸谷村落内及びその山沿いを通り、字橋場で再び国道と合している。この高戸谷産土神社境内に道祖神がある。初代賀和の書といわれる立派なものがあり、天保四（一八三三）年九月吉日当村講中と記されている。国道は千歳橋を渡って追貝に入るが、ここは会津道の重要地点であり、慶

会津道は宮古橋北側（大曲りともいう）で沢を下り現国道の右下を通り、東橋の下で後づ沢を渡って下貝戸（下街道）に出て右折すれば老神であり、ここまで大原より二キロ弱である。こここの片品川畔には樹令約六〇〇年といわれる経塚の松がある。<sup>(四)</sup>

昭和三十七年利根村の文化財として指定され高戸谷下原（下貝戸）の片品川に隣んで立つ大樹である。伝説によれば正平二十三（一三六八）年高平で新田義宗が戦死した後、一人の雪水が高戸谷の中ん沢に住みつき、毎日読経して過ごし、石を集めて一石一字ずつ経文を書き込み、新田氏や家臣のめい福を祈るために川岸に埋めて、その上に一本の松を植えたという。一本は枯れましたが、残った一本がこの経塚の松とされる。

いわれ、根回り五メートル、高さ約五メートル、四方に張った枝は地面近くまで垂れ下って威に見事である。

は正平二十三（一三六八）年高平で没した。戸谷の中津に住みつき、毎日読経を讀んだ。戸谷の門人として、文を書き込み、新田氏や家臣のめいを記した。本の松を植えたという。一本は枯れましたが、残った一本がこの経塚の松と伝えられています。

滝  
トル、高戸谷産土神社前で左折し、  
の高戸谷村落内及びその山沿いを通り

割字橋場で再び国道と合っている。この高戸谷産土神社境内に道祖神がある。(西)初代賢和の書といわれる立派な

九月吉日当村講中と記されている。

長五（一六〇〇）年以後、全長一九間、幅二間高欄つきの刎橋が架せられたものである。滝は高さ約一〇メートル、幅約五〇メートル、関東のナイヤガラなどとも呼ばれ、両岸の絶壁に映えそぞ麗景である。古くは高山彦九郎等も訪れており、吹割滝には竜宮の桙の伝説も伝えられている。

刎橋を渡つて追貝に入ると会津道

は国道沿いに進み、現在の郵便局前から右へ坂を上って森山（標高六六メートル）に出る。

吹割渓谷及び吹割滝がある。  
上毛かるたには、「滝は吹割れ片  
品溪谷」と詠まれているが、昭和十一  
年十一月十六日文部省より天然記念  
物及び名勝として指定されている。

片品川はこの附近で石英粗面岩の角  
砾混灰岩を削り、峡谷を形成してお  
り、これが吹割渓谷となつていて、  
河床は節理に乏しい凝灰岩から成つ  
て平坦なところが多く、千疊敷と呼ばれる広いところがある。また大小、数  
多くの凹穴があり、凝灰岩は數条の断層によつて横切られ地質学上からも重  
量な場所とされている。吹割滝は断層の断際に沿つて生じたもので河床が多  
年の水浸によつて削れ、そこに水が流れ落ちるもので、滝が両側から落ちて



洞谷 藏寺



追貝観音

片品川はこの附近で石英粗面岩の角  
砾混灰岩を削り、峡谷を形成してお  
り、これが吹割渓谷となつていて、  
河床は節理に乏しい凝灰岩から成つ  
て平坦なところが多く、千疊敷と呼ばれる広いところがある。また大小、数  
多くの凹穴があり、凝灰岩は數条の断層によつて横切られ地質学上からも重  
量な場所とされている。吹割滝は断層の断際に沿つて生じたもので河床が多  
年の水浸によつて削れ、そこに水が流れ落ちるもので、滝が両側から落ちて



追貝の芭蕉句碑

在の堂は安土桃山時代の建立と思われる。本尊の如意輪觀音像は左甚五郎の作と伝えられている。明治三十年頃から約七十年間所在不明となつていたが、その後由つて追貝に戻り、現在海藏寺に安置されている。

室町時代文明年間と推定され、現上流約三〇メートルには浮島がある。この景勝の島に浮島觀音堂がある。堂の創建は定かでないが、その他の仁王尊等の寺宝があり、海藏寺の檀信徒は東入りの全域に及んでいる。

この海藏寺は、曹洞宗で洞谷山海藏寺といふ。追貝森山にある。本尊は括葉觀音如来で、永正七（一五〇）年開基といわれ、明和七（一七七〇）年雷火によつて焼失したが、翌年再建され縁起書の他仁王尊等の寺宝があり、海藏寺の檀信徒は東入りの全域に及んでいる。

この追貝には二つの芭蕉句碑がある。

「芭翁」や命をからむつたかづら

高木谷小沢片路にあり眼下には吹割渓の跡とびの滝がながめられる景勝の地で、句はこの場所にも合つており自然石に雄揮な文字で書かれている。

夏末でもただ一つ葉のひとつかな  
追貝の利根村役場前の国道わきにあり芭蕉貞享五（一六八八）年の作で芭  
齊の書である。

吹割れる状況なので、この名が生じたものであろう。滝は高さ約一〇メートル、幅約五〇メートル、

関東のナイヤガラなどとも呼ばれ、両岸の絶壁に映えそぞ麗景である。古くは高山彦九郎等も訪れており、吹割滝には竜宮の桙の伝説も伝えられている。



須田加賀之助の献額



利根村千鳥田道家並

また、追貝の大國神社には獅子舞と足跡かくしがある。

三月二十九日春祭りに獅子舞が行わる、奉納全戸を回る。二人で組んだ獅子と、槍を持った二人の獅子とりが笛と太鼓に合せて舞い、「この獅子ところてあの山駆けた、この獅子とろとてこの山駆けた」「でつかいもんじや、でつかいもんじや」とはやす。

秋祭りは十一月一日行われ「足跡かくしの祭り」と呼ばれる。古くは追貝の鎮守は森山の山妻有大明神であり、この御神体に建久九（一一九八）年と記された木像三体が星野泰宏氏宅にあり、享保十七（一七三二）年の祝詞も保管されている。「足跡かくし」のいわれば、高平で戦死した新田義宗の奥方と幼い子達が逃れてきてこの地にどまり、再び追手を避け北へ逃れる時、村人の祈願により鎮守様の御靈験で紅葉のあるのに雪が降り、足跡をかくして追手を防いだといわれ、今でも追貝の秋祭りには必ず足跡かくしの雪が降

るといわれる。

旧道は更に上つて高原へ出ると追貝原である。この辺りは一部旧道の面影をとどめている。ここから石上坂を下り駒寄せから千鳥新田へと進む。追貝は約二キロ余の距離である。千鳥新田に入る左側景勝の地にお富士さまと呼ばれる石宮があり、宝曆八（一七五八）寅年六月と記されている。会津道はここから下つて千鳥の集落に入り直進するが、約一五〇メートル進んだところに大正三年の道標がある。ここから左折し土橋で渾川を渡り宇日向の八幡宮前へ通する近道のあつたことは明らかで、道標にも会津道近道と記されている。ここから約二〇〇メートルのところに一基の双体道祖神があるが、更に進むと鉢橋に至り、ここでは渾川を渡ると平川である。鉢橋は渾川の架橋場所として唯一最適の場所に架せられ、橋を渡つた右手は宮平といわれて日光神社がある。

会津道はここから渾川沿いにしばらく下り坂を進むとバス停切り通しのところ国道と合するが、千鳥より約一キロ余の距離である。街道から渾川沿いに一キロ程東にはいったところに判官堂がある。

伝説によれば源義経が奥州に赴く時しばらくとどまつたところとされ、現在の堂は安永の頃の建立と考えられる。ここには義経、弁慶、海蔵の木像がある。

また、平川には延喜年間開基といわれる古滝庵不動尊があり、雨乞い不動として人々の尊崇をうけてきた。ここには文政十三（一八二〇）年園原駿動の発端となつた法神流の創士星野房之助（須田加賀之助）の献額（藤賀和の書）があり、境内にある松、杉など拾数本と共に利根村指定文化財となつてゐる。

先のバス停より、北上し武尊口、武尊高校前、平原入口とほとんど平川を直進している。

伊香原からは左へ坂を下り片品川を土橋で渡り、対岸の片品村幡谷へ通す道路もあつたが今は廃道となつてゐる。

平原入口から入ると、瀬峯橋で国道は左へ大きくうかいしているが、会津道は山麓沿いに宇前原を横切って立沢へ下る。

立沢は下立沢、上立沢と分かれているが、大立沢を渡って上立沢からは片品村となる。伊香原のバス停から約一・五キロである。国道は須賀川へ直進しているが、会津道はここから右へ坂を下り下平、築地、菅沼といわゆる上の段への道順をとっている。大立沢から菅沼まで約三キロ程である。

下平から菅沼へはなだらかな高原であるが、菅沼の西原には「右小川道、左土出会津道」と彫られた道祖神があり、ここは「合途」と呼ばれて古くからの追分であり、どうけん塚と呼ばれる塚があつて、延宝三（一六七五）年戊午八月吉日建立とされる宝篋印塔などがあり、ここから鎌田へ下る道路もある。

鎌田には

花に浮世我が飯黒く酒白し  
の芭蕉句碑がある。

菅沼から東小川へ下る会津道の松並木にあつたものであるが、現在は鎌田から片品中学校へ行く道の左側入沢氏宅の庭にある。<sup>〔四〕</sup>

鎌田には日本武尊、建御名方命等を祭神とする笠科神社があり、元禄四年（一六九一）年の銘のある鈴口などあるが、これは明治四十年各大学の神社を合祭したもので、古く笠科郷に鎮座したと伝えられる「從三位笠科明神」についてはその所在地は明らかでない。

会津道はここから更に北東へ進み、東田代を経て坂を下り現片品中学校前を通つて大滝川の左岸へ出ているが、古くはこの辺りに松並木があつたといふことで、大松の地名も残っている。会津道は大滝川を渡つて東小川中井に出て国道と合するが、ここにも道祖神があつて、左手を上げて方向を指し、「右あらやまみち」安永九（一七八〇）年五月十七日と彫まれている。

この東小川への一キロ程の道は街道の面影をとどめている。



鐘楼 松樹院德応寺

街道東、国  
道沿いに曹洞宗  
松樹山巣治院  
徳応寺があ  
る。

また、東小川大沢の高台には大御堂と呼ばれる観音堂があり、県指定の重要文化財の観音像がある。お堂は最近改築されたが正和三（一二三四）年と記されたもの外、何枚もの古い棟板が保管され、観音像は檜の一本造りで、文明十八（一四六六）丙午年三月十一日和泉の銘が記されている。

東小川には芭蕉の句碑が二基ある。<sup>〔四〕</sup>  
涼しさや直ぐに野松の枝の影  
あつたものである。

上小川の觀音堂前にある。  
枝むすぶ桜や露も洩らさじと

国道はここから東へ進み金精岬に至るが、会津道は左へ坂を下り、千明牧場のある高原を西へ進み、越本の対岸で曲りくねった急坂を下り片品川畔に出ていた。ここから左岸を開拓に通することもできるが、会津道は細工屋橋のところを渡つて越本へ進んだのである、橋の手前には「しょうずか婆さん」

III 沼田街道・会津街道の現状と文化財



片品村越本集落田道



細久屋橋たもと石仏

賀川の中程から左折して片品川を渡り御座入に通する道がある。これは川場村木賊から背瀬・千貫等の峠を越えて片品村花咲に出て、再び宇条田村を越えて御座入に出る会津道の裏街道と連結しており、御座入には寛文七(一六六七)歳金乙卯四月十五日海藏十二世文貞記とある供養塔や、文政二(一八一九)卯年四月吉日と彫られた道標を兼ねた馬頭観世音もある。また御座入から片品川右岸の断崖を通り、鎌田の対岸から大田越本方面へ通する小径もあつたが、危険でありいまは通行する者がいない。

須賀川から大崖へ入る国道右側には明治戊申戦争に須賀川で最後を遂げた幕臣羽倉綱三郎、前橋藩士屋代由平、日光山僧昌松正邦等三名の墓があり、傍らには「三

一方国道は立沢から須賀川へと直進しているが、須賀川の橋を渡ったところには道祖神が建っている。東小川から越本まで約一・五キロ程である。

の石仏、橋を渡っ

たところには道祖

神が建っている。

東小川から越本ま

で約一・五キロ程筋に家が並び南北約四キロにわたる細長い集落である。

烈士の碑」が建てられている。

会津道は細工屋橋を渡り、少し上って尾瀬に通ずる県道沼田・田島線と合し、ここからは越本谷の日向側、即ち片品川右岸沿いに土出へと進んでいる。

越本は古くから会津道の宿駅で南から大田、細工屋、阿村、上而、中里と道

9 大原新町から越本集落へ

No.	名 称	年 号	備 考
127	経塚の松	樹令六〇〇年 利根村指定天然記念物	
128	産土神社道祖神	利根村役場前	
129	芭蕉句碑	高戸谷小沢片路	
130	芭蕉句碑	片品川追憶地内	
131	吹割浦	本尊・如意輪観音像	国指定天然記念物及び名勝
132	浮島觀音堂	本尊・括葉觀音像	
133	海藏寺	水庄七年開基	
134	道標	慶長五年	
135	道標	天保四年	
136	双体道祖神	利根村役場前	
137	日光神社	高戸谷小沢片路	
138	判官堂	片品川追憶地内	
139	道標	本尊・括葉觀音像	
140	双体道祖神道標	千鳥地内	
141	芭蕉句碑	宮地内	
142	芭蕉句碑	千鳥地内	
143	龜治院德宏寺	菅沼地内	
144	芭蕉句碑及び三面仏	轟谷地内	
145	石 仏	義経・弁慶等の木像	
146	音 昌 寺	本尊・觀音像	
147	芭蕉句碑	大正三年	
148	芭蕉句碑	千鳥地内	
149	芭蕉句碑	宮地内	
150	芭蕉句碑	菅沼地内	
151	芭蕉句碑	轟谷地内	
152	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
153	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
154	芭蕉句碑	大正三年	
155	芭蕉句碑	千鳥地内	
156	芭蕉句碑	菅沼地内	
157	芭蕉句碑	轟谷地内	
158	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
159	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
160	芭蕉句碑	大正三年	
161	芭蕉句碑	千鳥地内	
162	芭蕉句碑	菅沼地内	
163	芭蕉句碑	轟谷地内	
164	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
165	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
166	芭蕉句碑	大正三年	
167	芭蕉句碑	千鳥地内	
168	芭蕉句碑	菅沼地内	
169	芭蕉句碑	轟谷地内	
170	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
171	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
172	芭蕉句碑	大正三年	
173	芭蕉句碑	千鳥地内	
174	芭蕉句碑	菅沼地内	
175	芭蕉句碑	轟谷地内	
176	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
177	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
178	芭蕉句碑	大正三年	
179	芭蕉句碑	千鳥地内	
180	芭蕉句碑	菅沼地内	
181	芭蕉句碑	轟谷地内	
182	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
183	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
184	芭蕉句碑	大正三年	
185	芭蕉句碑	千鳥地内	
186	芭蕉句碑	菅沼地内	
187	芭蕉句碑	轟谷地内	
188	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
189	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
190	芭蕉句碑	大正三年	
191	芭蕉句碑	千鳥地内	
192	芭蕉句碑	菅沼地内	
193	芭蕉句碑	轟谷地内	
194	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
195	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
196	芭蕉句碑	大正三年	
197	芭蕉句碑	千鳥地内	
198	芭蕉句碑	菅沼地内	
199	芭蕉句碑	轟谷地内	
200	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
201	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
202	芭蕉句碑	大正三年	
203	芭蕉句碑	千鳥地内	
204	芭蕉句碑	菅沼地内	
205	芭蕉句碑	轟谷地内	
206	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
207	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
208	芭蕉句碑	大正三年	
209	芭蕉句碑	千鳥地内	
210	芭蕉句碑	菅沼地内	
211	芭蕉句碑	轟谷地内	
212	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
213	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
214	芭蕉句碑	大正三年	
215	芭蕉句碑	千鳥地内	
216	芭蕉句碑	菅沼地内	
217	芭蕉句碑	轟谷地内	
218	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
219	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
220	芭蕉句碑	大正三年	
221	芭蕉句碑	千鳥地内	
222	芭蕉句碑	菅沼地内	
223	芭蕉句碑	轟谷地内	
224	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
225	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
226	芭蕉句碑	大正三年	
227	芭蕉句碑	千鳥地内	
228	芭蕉句碑	菅沼地内	
229	芭蕉句碑	轟谷地内	
230	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
231	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
232	芭蕉句碑	大正三年	
233	芭蕉句碑	千鳥地内	
234	芭蕉句碑	菅沼地内	
235	芭蕉句碑	轟谷地内	
236	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
237	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
238	芭蕉句碑	大正三年	
239	芭蕉句碑	千鳥地内	
240	芭蕉句碑	菅沼地内	
241	芭蕉句碑	轟谷地内	
242	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
243	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
244	芭蕉句碑	大正三年	
245	芭蕉句碑	千鳥地内	
246	芭蕉句碑	菅沼地内	
247	芭蕉句碑	轟谷地内	
248	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
249	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
250	芭蕉句碑	大正三年	
251	芭蕉句碑	千鳥地内	
252	芭蕉句碑	菅沼地内	
253	芭蕉句碑	轟谷地内	
254	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
255	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
256	芭蕉句碑	大正三年	
257	芭蕉句碑	千鳥地内	
258	芭蕉句碑	菅沼地内	
259	芭蕉句碑	轟谷地内	
260	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
261	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
262	芭蕉句碑	大正三年	
263	芭蕉句碑	千鳥地内	
264	芭蕉句碑	菅沼地内	
265	芭蕉句碑	轟谷地内	
266	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
267	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
268	芭蕉句碑	大正三年	
269	芭蕉句碑	千鳥地内	
270	芭蕉句碑	菅沼地内	
271	芭蕉句碑	轟谷地内	
272	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
273	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
274	芭蕉句碑	大正三年	
275	芭蕉句碑	千鳥地内	
276	芭蕉句碑	菅沼地内	
277	芭蕉句碑	轟谷地内	
278	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
279	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
280	芭蕉句碑	大正三年	
281	芭蕉句碑	千鳥地内	
282	芭蕉句碑	菅沼地内	
283	芭蕉句碑	轟谷地内	
284	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
285	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
286	芭蕉句碑	大正三年	
287	芭蕉句碑	千鳥地内	
288	芭蕉句碑	菅沼地内	
289	芭蕉句碑	轟谷地内	
290	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
291	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
292	芭蕉句碑	大正三年	
293	芭蕉句碑	千鳥地内	
294	芭蕉句碑	菅沼地内	
295	芭蕉句碑	轟谷地内	
296	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
297	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
298	芭蕉句碑	大正三年	
299	芭蕉句碑	千鳥地内	
300	芭蕉句碑	菅沼地内	
301	芭蕉句碑	轟谷地内	
302	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
303	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
304	芭蕉句碑	大正三年	
305	芭蕉句碑	千鳥地内	
306	芭蕉句碑	菅沼地内	
307	芭蕉句碑	轟谷地内	
308	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
309	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
310	芭蕉句碑	大正三年	
311	芭蕉句碑	千鳥地内	
312	芭蕉句碑	菅沼地内	
313	芭蕉句碑	轟谷地内	
314	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
315	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
316	芭蕉句碑	大正三年	
317	芭蕉句碑	千鳥地内	
318	芭蕉句碑	菅沼地内	
319	芭蕉句碑	轟谷地内	
320	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
321	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
322	芭蕉句碑	大正三年	
323	芭蕉句碑	千鳥地内	
324	芭蕉句碑	菅沼地内	
325	芭蕉句碑	轟谷地内	
326	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
327	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
328	芭蕉句碑	大正三年	
329	芭蕉句碑	千鳥地内	
330	芭蕉句碑	菅沼地内	
331	芭蕉句碑	轟谷地内	
332	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
333	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
334	芭蕉句碑	大正三年	
335	芭蕉句碑	千鳥地内	
336	芭蕉句碑	菅沼地内	
337	芭蕉句碑	轟谷地内	
338	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
339	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
340	芭蕉句碑	大正三年	
341	芭蕉句碑	千鳥地内	
342	芭蕉句碑	菅沼地内	
343	芭蕉句碑	轟谷地内	
344	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
345	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
346	芭蕉句碑	大正三年	
347	芭蕉句碑	千鳥地内	
348	芭蕉句碑	菅沼地内	
349	芭蕉句碑	轟谷地内	
350	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
351	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
352	芭蕉句碑	大正三年	
353	芭蕉句碑	千鳥地内	
354	芭蕉句碑	菅沼地内	
355	芭蕉句碑	轟谷地内	
356	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
357	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
358	芭蕉句碑	大正三年	
359	芭蕉句碑	千鳥地内	
360	芭蕉句碑	菅沼地内	
361	芭蕉句碑	轟谷地内	
362	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
363	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
364	芭蕉句碑	大正三年	
365	芭蕉句碑	千鳥地内	
366	芭蕉句碑	菅沼地内	
367	芭蕉句碑	轟谷地内	
368	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
369	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
370	芭蕉句碑	大正三年	
371	芭蕉句碑	千鳥地内	
372	芭蕉句碑	菅沼地内	
373	芭蕉句碑	轟谷地内	
374	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
375	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
376	芭蕉句碑	大正三年	
377	芭蕉句碑	千鳥地内	
378	芭蕉句碑	菅沼地内	
379	芭蕉句碑	轟谷地内	
380	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
381	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
382	芭蕉句碑	大正三年	
383	芭蕉句碑	千鳥地内	
384	芭蕉句碑	菅沼地内	
385	芭蕉句碑	轟谷地内	
386	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
387	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
388	芭蕉句碑	大正三年	
389	芭蕉句碑	千鳥地内	
390	芭蕉句碑	菅沼地内	
391	芭蕉句碑	轟谷地内	
392	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
393	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
394	芭蕉句碑	大正三年	
395	芭蕉句碑	千鳥地内	
396	芭蕉句碑	菅沼地内	
397	芭蕉句碑	轟谷地内	
398	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
399	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
400	芭蕉句碑	大正三年	
401	芭蕉句碑	千鳥地内	
402	芭蕉句碑	菅沼地内	
403	芭蕉句碑	轟谷地内	
404	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
405	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
406	芭蕉句碑	大正三年	
407	芭蕉句碑	千鳥地内	
408	芭蕉句碑	菅沼地内	
409	芭蕉句碑	轟谷地内	
410	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
411	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
412	芭蕉句碑	大正三年	
413	芭蕉句碑	千鳥地内	
414	芭蕉句碑	菅沼地内	
415	芭蕉句碑	轟谷地内	
416	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
417	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
418	芭蕉句碑	大正三年	
419	芭蕉句碑	千鳥地内	
420	芭蕉句碑	菅沼地内	
421	芭蕉句碑	轟谷地内	
422	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
423	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
424	芭蕉句碑	大正三年	
425	芭蕉句碑	千鳥地内	
426	芭蕉句碑	菅沼地内	
427	芭蕉句碑	轟谷地内	
428	芭蕉句碑	義経・弁慶等の木像	
429	芭蕉句碑	本尊・觀音像	
430	芭蕉句碑	大正三年	
431	芭蕉句碑	千鳥地内	
432	芭蕉句碑	菅沼地内	
433	芭蕉句碑	轟谷地内	
434			

## 一〇、越本集落から国境へ

中里から少し坂を上ると土出に入るが、ここは古く土井出庄であり、新井の湯と呼ばれる温泉地でもある。民宿みさわのところから右折し千代田館前を通って三松橋を渡ると右は閑野、左は伊閑町である。橋のたもと閑野の三本辻にある萩原商店の前には、西側「此の方追貝会津道」北側「此の方戸倉会津道」と彫られた道標があつたが、今は道路下の河原へ落されてしまっている。この道標からも会津道は新井で橋を渡つて左岸へ移り、左折して伊閑町から土出橋へと進んでいたことがわかり、また越本の対岸細工屋橋のところから左岸沿いに閑野を通つて来る道もあり、片品川の影響によって時には左岸をも通行したのである。



片品村閑野の土蔵（右新道、左旧道）



大円寺間引の絵馬

土出は新井、閑野、伊閑町、古仲と四つの集落からなり、いずれも会津道の道筋で、萩原家は問屋であった。  
会津道は伊閑町を過ぎると土出橋を渡り、古仲へ入つて右折し大円寺前を北へ進む。  
この金雞山大円寺の宗派は曹洞宗で、本尊は虚空藏菩薩である。<sup>(1)</sup> 保元三（一五八）年創立といわれる。  
寺内には阿弥陀堂があつて木彫の観音立像があり、堂の傍らには慶応四年（一八六八）年戸倉戦争で戦死した吉井薄土伊藤長三郎の墓がある。戸倉戦争の時大円寺は官軍の本營となり、「東山道先鋒統督巡察使宿陣」外一枚の掛札があり、本堂の壁には宿營した官軍兵士の落書きも残つている。なお、同寺には封建時代庶民の悲惨な生活をしのばせる本県最古のものとされる間引きの絵馬が残されているが、画面は既に明らかでない。  
土出新井の多聞院跡には芭蕉の句碑がある。  
芭麦はまだ花でもてなす山路かな

また、閑野の南のはずれ丘の上に觀音堂があり、觀音像は黄金色の台座のついた座像であるが見事なもので片品村重要文化財として指定されている。街道は大円寺前から北へ進み、現在りんご園となつてあるあたりを片品川の右岸沿いにさかのぼつてある。この道筋が会津道の本道であつたといわれ、今も多重供養塔なども残つてゐるが狭い峡谷となつてゐる。ここを過ぎると古く菅刈り場であったという丸山、またの名をくそべ山があり戸倉の手前、片品川と笠科川の合流点で笠科川を渡り戸倉へ入つたが、越本のはずれより戸倉まで三・五キロ余りである。この道路は現在通行する者はまれである。一方土出橋の左岸から戸倉へ向かう道もあり伊閑町から来た旅人は急な坂を上つて仙の畠から戸倉へ入ることもでき、現在の道路はこの道筋である。会津道は戸倉へ入ると武尊神社のあるりから片品川沿いに進み、ホテル玉城屋の裏手に渓谷に臨んで関所があつた<sup>(2)</sup>。関所は間口五間奥行三間の番所が



群馬県教育委員会では、昭和五十三年度より四か年計画で、歴史の道調査を始め、本年度はその二年目である。今回、三国街道・会津・沼田街道、信州街道の三街道の調査を完了した。

この歴史の道調査も一年目であるが、未だしかるべき調査・研究の方法論も定まらず、調査の実際にはたって様々な困難点があったが、それらを克服し、大きな成果を挙げることができた。

まず、各街道について膨大な資料収集ができる、それにより報告書作成にあたり適切な資料が選択できたことである。さらに、大きな収穫は本来の目標である街道の的確な現状把握がなされ、旧態をとどめる地域・滅失した地域を確實にとらえることができたことである。

しかし、編集上、やや一貫した記述に欠けたことは、今後留意しなければならない点である。

いま、本報告書を刊行することができたが、これは調査員の方々の労苦によるところが大きい。それぞれ忙しい本務を抱えながら、調査に積極的に参加していただいた。また、自動車もいらすわすかに道の名残をとどめる細道を何キロも歩いて調査されたり、廃道になつた旧道跡をくま縦をかき分け、確かめられたり、地道な調査を根気よく続けてくれたお陰であり、ここに深謝するしたいである。

この調査により、旧態をとどめた地域が一層明らかとなり、これは大きな成果であるとともに、大きな課題でもある。今後、保存を含めどう対処したらよいか、本書の発刊を機に多くの人々から示唆がいたなければ幸いである。

(文化財保護課)

## 沼田・会津街道

---

印刷 昭和55年3月25日

発行 昭和55年3月31日

---

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一丁目1の1

TEL 0272-23-1111

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

印刷 朝日印刷工業株式会社

---